

凡 4
3647
4

駿河憲七

成田叅詣記卷四目次

佐倉佐倉城

八幡社

海隣寺

古文書 千葉氏遺物 常胤木像 貞胤木像 永祿八年阿弥陀木像識 太鼓胸

本佐倉町佐倉故城址

千葉系図二種

萬千代殿屋敷

大佐倉村長勝寺

福德二年野口

清光寺

大樹寺殿御齒骨墓 正安二年阿弥陀銅像識 古硯 無歲月觀音銅像識

大佐倉村勝胤寺

千葉氏遺物

印播沼

印播村淨泉寺

應永二十二年雲版 古文書 天文廿三年觀音像

三三三

成田參詣記卷四

佐倉城

印播郡鹿島山あり

今の城地と鹿島郷と云ハ古きこと見え 街坊六町

田町新町弥勒町本町 幸佐倉町酒々井町

江戸より十三里十八町餘天正十六年七月千葉介邦胤

卒一十月北條氏政

こころらひして新館と此地小菅に邦胤の長女

東として居む家臣中村雅樂介に此小傳く同十八年七月小田原落

城の後嗣子重胤流落一東ハ大府に後宮小仕ふ是歳八月小久野

三郎右衛門尉宗能封せらる民部小任に宗能率一子民部少輔宗秀

嗣く慶長七年宗秀封と遠江の國久野小轉一廢城とる同十六年

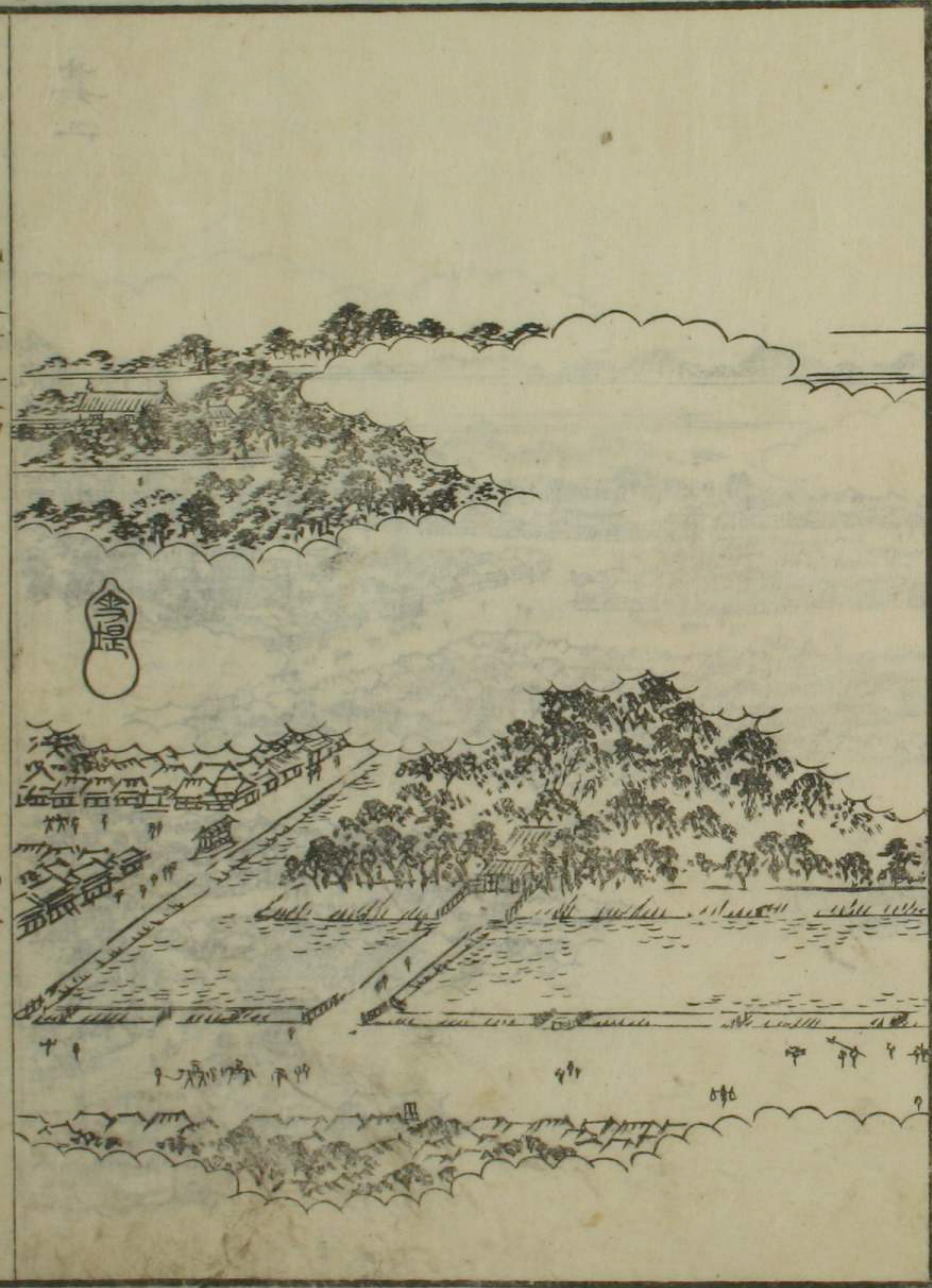
土井大炊頭利勝改め築く元和元年城溝功成て移居は是より本州

要鎮の治城とせらる

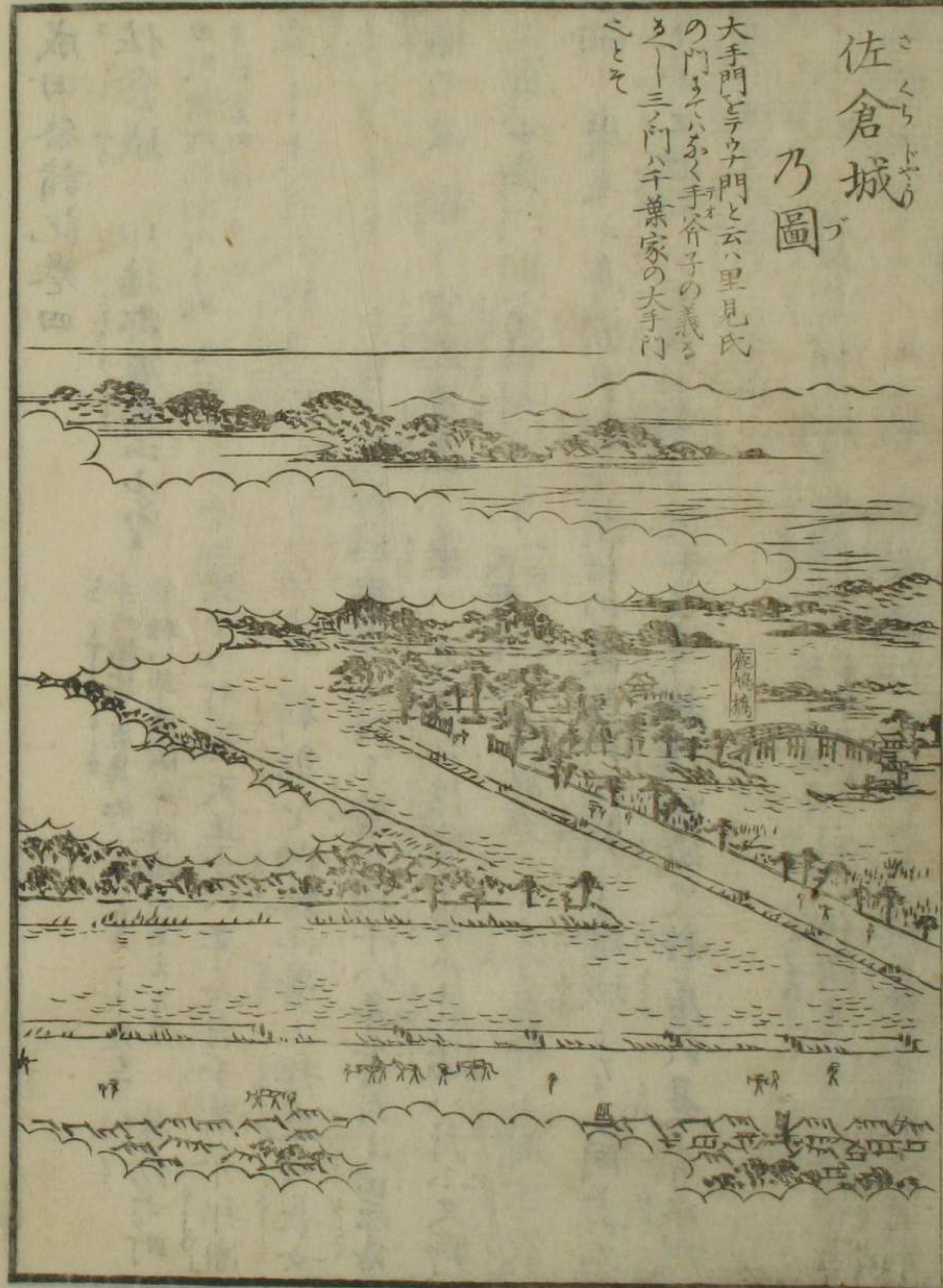
八幡社

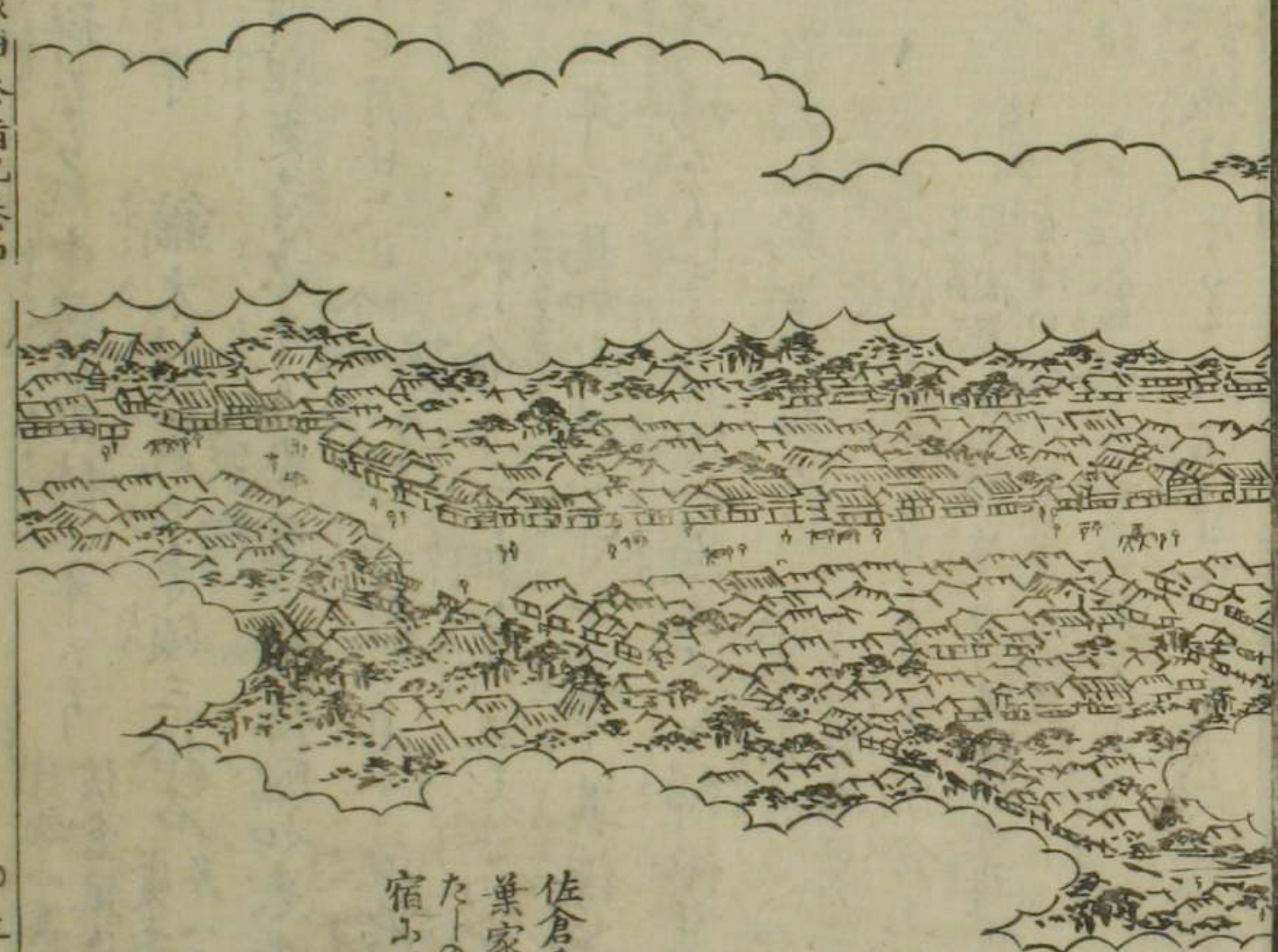
大佐倉村小あり社領廿石天正十九年 社傳詳なるは八月十二日

の祭祀あり此日酒々井へ神幸競馬の祭あり別當と大櫻山寶村

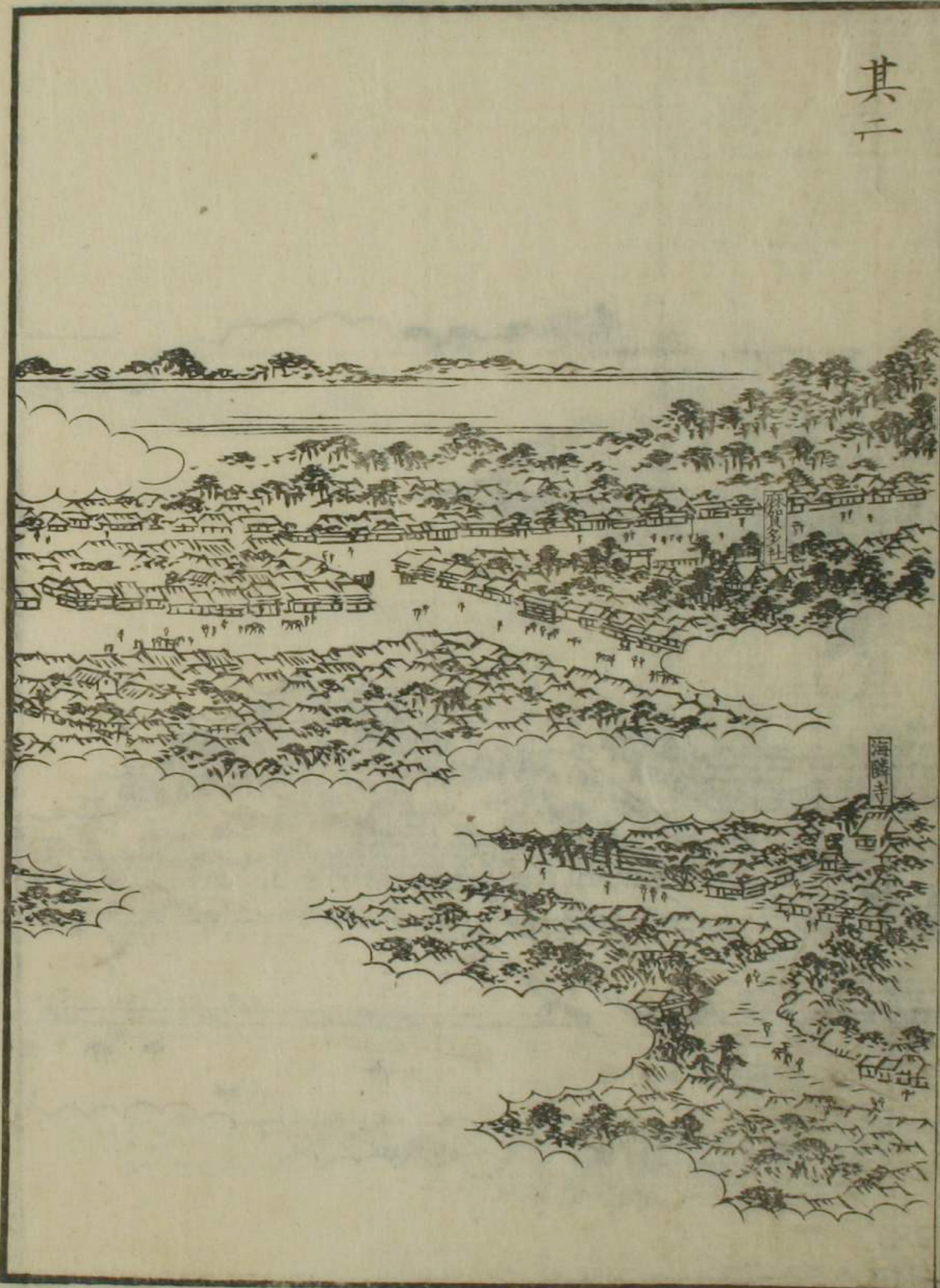


佐倉城さくらじょう
乃圖のずら
大手門とテウ門と云ハ里見氏
の門よりハテテ手斧子の義
と一三ノ門ハ千葉家の大手門
ことそ





佐倉の本町元康高宿と云々
葉家本佐倉小治城のとき
たの宿多今宿継場此
宿おてつとむと云



海隣寺所蔵文書

院と云開基詳ならず中興ハ永徳三年なり
 千葉山海隣寺 鐫木村にあり寺領三十拾石 慶安元年八月 時宗にて相摸
 此當麻山每量光寺末たり本尊ハ阿弥陀如来寺此傳ハ千葉介常
 胤治承三年七月廿六日 今モ此目ふ 子孫と具シ海邊小出て月を歎シ
 をり海上異光あり夕共ハ命して網と打むる小 金色此阿弥陀像成
 得たり文治三年に馬加地小寺と建て其像と安ん即ち此寺なり
 元ハ真言此道場なりしハ貞胤一遍上人と帰依せし後ハ時宗となり
 他阿上人真教大和尚と中興と云 一遍松壽九智真ハ伊豫の河野通泰の馬
 加康胤千葉介胤直の後と受千葉より本佐倉小移りしをり 此地小
 引寺と云と云 常胤貞胤の影像あり高五六寸許り
 本佐倉故城址 本佐倉根古屋此地にあり 根古屋と昔ハ柵と云ハ永徳
 即將門山の故城址なり 此城昔此さまハ大手ハ今の穢多町の邊に

同千葉氏遺物

奉寄進海上月越如來

下総國 馬加伊付除佛 椿田保神館 奉

右意起者又長地久御願
 圓滿殊平貞胤必一願
 决之成就故奉寄進狀如件
 延文五年卯月庚寅 官内大輔 光胤 印

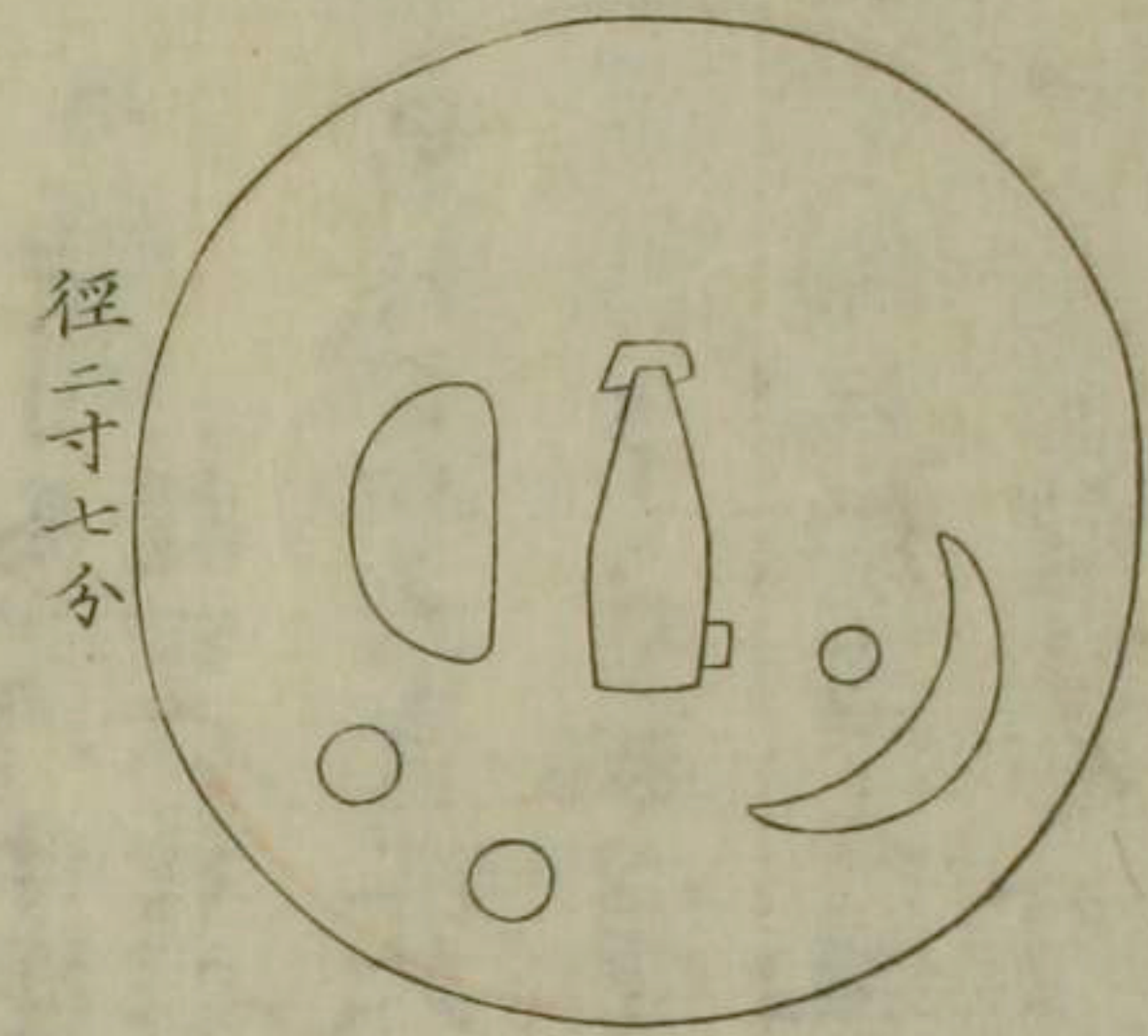
千葉氏之友佐

紫銅之覆輪アリ地ハ鉄ナリ

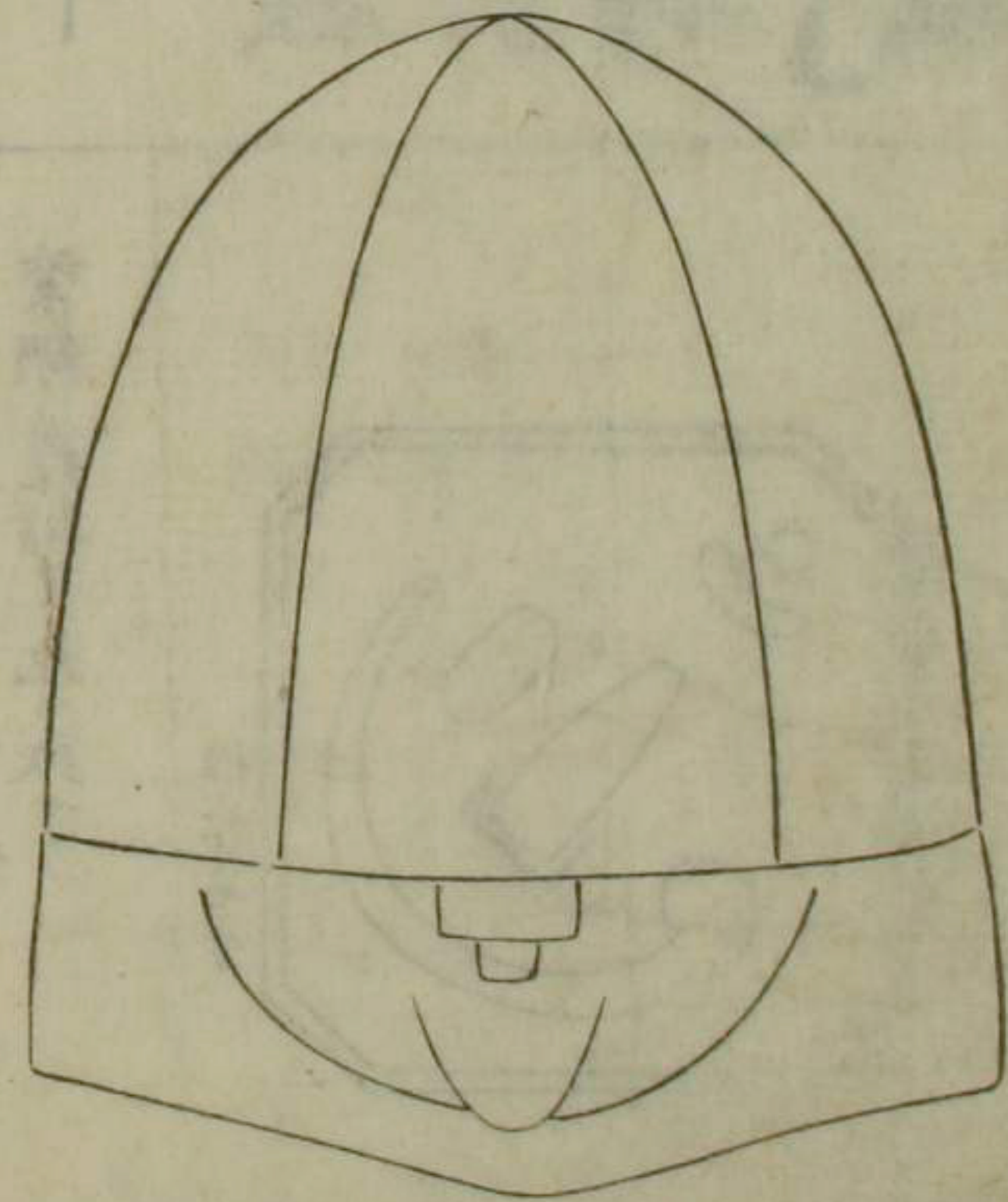


徑三寸七分

同鐵鑿



同堯



外ニ鏡五面 方鏡一 裏ニ月星紋アルモノ 龜形アルモノ
杯ニ一六龜雀形ハ尉ト姥ノ形アリ 霍龜ハ千葉ノ別紋ナリ

同寺千葉介常胤肖像 丈ケ八寸

又貞胤像ト云アリサレド面貌同シテ
辨知シカタシ只両手ハナルノミ



敬白
奉刻彫阿弥陀
如來并二菩薩像
厥造像意趣者
平朝臣親胤眼

阿弥陀佛爲煩證仏果之
爰以則離三有繫縛キ女
執速至安養無垢淨刹
無疑者や仍法界普利
下総国印東在佐倉
長徳寺開山眼阿
佛仰淨慶
于時永祿八年ノ七月十四
於康嶋御印播郡
彫之

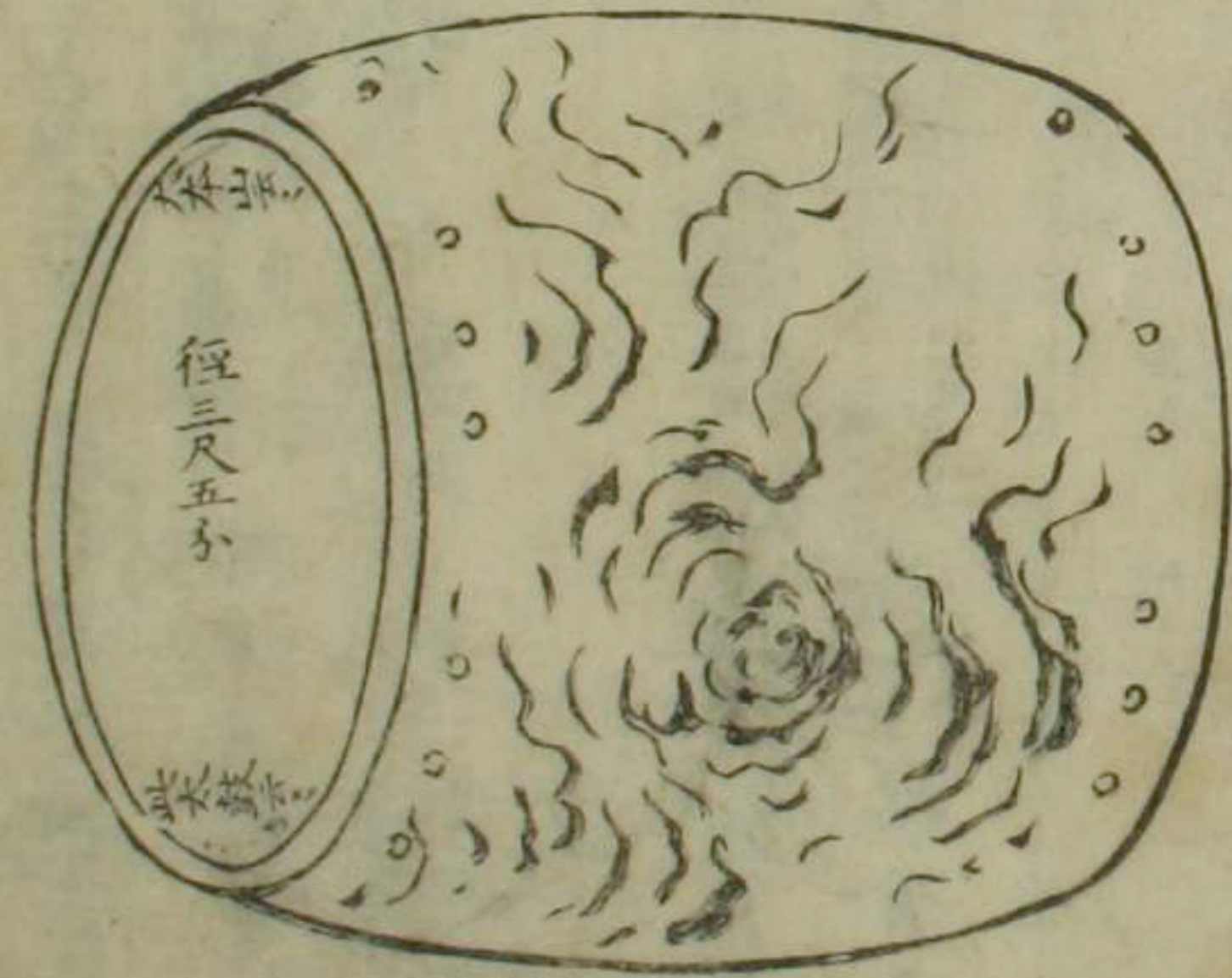
以上同寺持佛阿弥陀如來木像識
千葉介貞胤肖像
丈五尺二寸



大本山箱州無量光寺ニ而四十代
當寺從中興七世
本蓮社欣譽他阿
尊海上人代

此太鼓之木者御城主
稻葉丹後守様將門山
壹丈壹尺五寸廻之松木
被下是ニ而掘申候
宝永三丙戌歳六月日

同寺蔵太鼓胴



二の門ハ今神明社の華表に所なり長祿中馬加康胤乃子輔胤千葉
と云此小移りしと云九代重胤小玉り天正十八年七月小田原と共小城
陥る八月久野三郎左衛門尉宗能今紀州家附之當時ハ此地小封せらるる
年中子民部少輔宗秀遠州之野へ所替して廢城とす後慶長十四年土井利勝此地小封
せられし城と鹿島此地小改め築つる今此佐倉城と社なり

○房總治乱記小天正十八年八月九日領地拜領四箇國の分を佐倉三

監物差次二百石 佐倉之内 本多隆敏ハ佐倉の内益田并々々一原後所領の地 佐倉之内 三郎

左衛門宗能任民部 佐倉之内 山本帶刀頼重 と見ゆ

○將門山の地ハ承平の昔一平の將門の構せし址なり普通奉今昔物語和朔
十四小時將門の舍弟將頼將平安房守興世執事佐倉太郎以下七百
餘人と引具し為行方と尻目にならんと勝つたる秀郷九千餘人
小舎釋もななくけあらせ 普通奉ハ澄とハなりしとけ此と とある輔胤其
佐倉太郎と云ハ故あることなる

故址小よりなる也

○関東古戦録に下總國印播郡佐倉の城主 今奉佐 千葉介胤富往一

酉 天正十の歳五月七日逝去 紀年誤 子息新助邦胤二十六歳小一

替と所も今既小四年と経たり天正十六年 房總治乱記十三年ハ 戊子正月初

旬新正嘉儀として旗下の士大将六人佐倉城へ来て毎例の

礼式と整へ書院小於て饗應ある時小鎌田 鎌田ハ鎌田の誤を也 治乱記諸

万五郎と云る近習の冠者ハ八歳 治乱記廿 配膳と勤る間に放屁

と云る兩度小おふ邦胤大少怒て眼をいらけ奪りめて叱られけ此ハ五

郎其坐於中央に踞る率尔の失礼ハ庸者有ぬと云るなるにうも

坐中に於て形の如く面を辱しめと衆る衆情なき仕合なりと

なく中ける故邦胤ゆり堪蓋立掛りけたふし短刀小手と掛り

と引立て退去なさし列坐於士大将兎小角に宥りて推津至水小

召預けさし置ける元より微差者たるの差異を辨へし不及と爲りて不覺の答ふに其の条其咎を赦免あるべき旨連々名代けりて閏五月中旬勅氣をゆるぎ社出勤して居たりけるが宸初首尾毎念ふたもいほめて折あらは鬱憤を散らすと二六時中隙を伺ひし程に七月四日の夜半より竟小邦胤の寐間へ忍入り二刀刺て逃出たり千葉介起上りて憎ま小世悔めり所爲我と唯一色す社一次の間小居たりし宿直の者とも聞付て走り入て見侍社に邦胤朱般小成て鎌田めを脱さし打捕社と漸く小云捨て事切社たる也本寺過去帳小邦胤歿田孫五郎社にして御願と切付天正十三年五月七日廿九才にて逝去。治記七月五日小作家人小仰天して八方手分とをり捜し求社とも見えざりける鎌田の夜中の事社に城門を閉たり暗さ暗し洩出ん方なりし物陰小隠社居て暁天小至り堀を乗逃奔て菊間の臺まで落行し追手社人救前途小充滿して中へ逃るべきやうなりし社に林の中へ分け

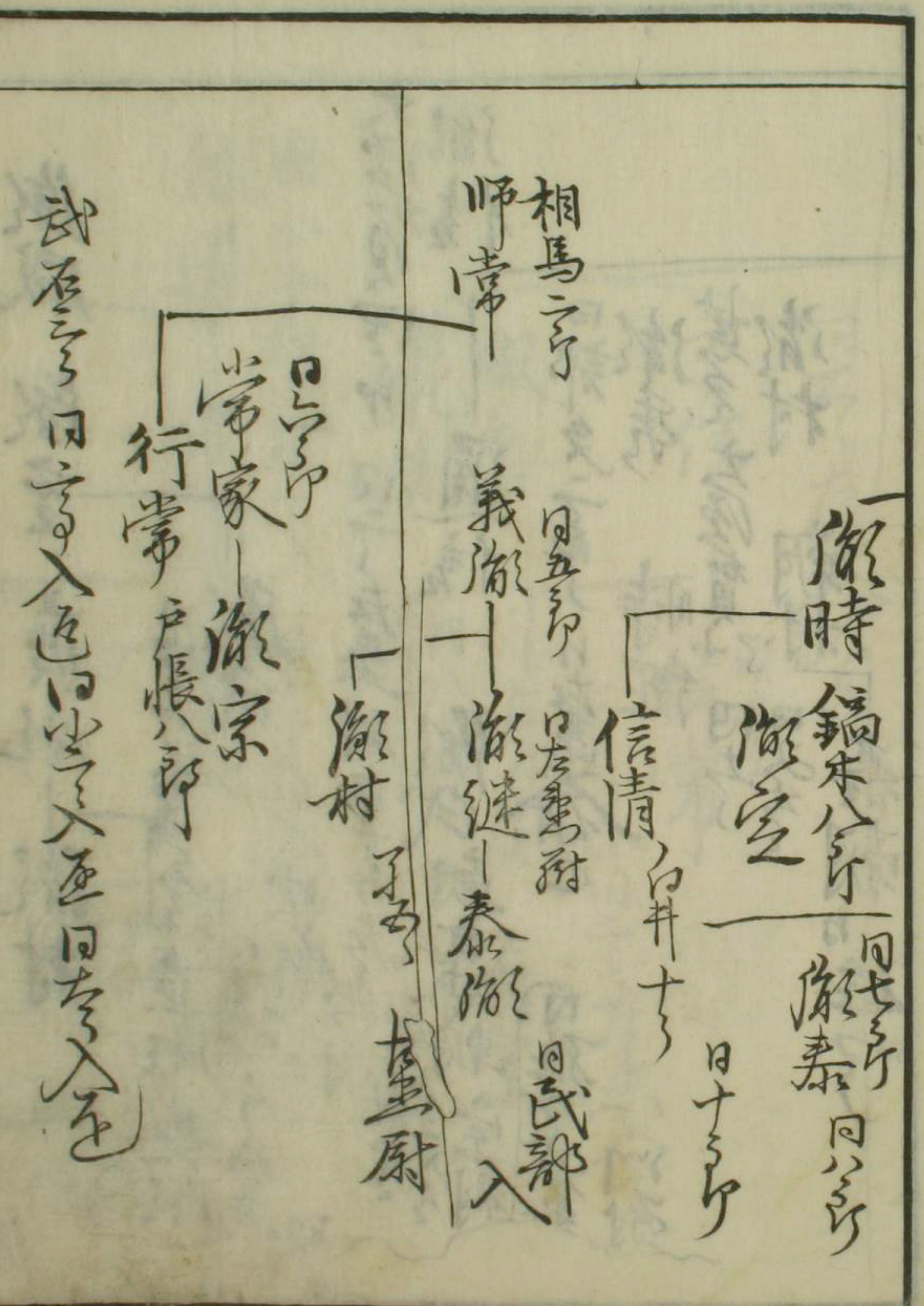
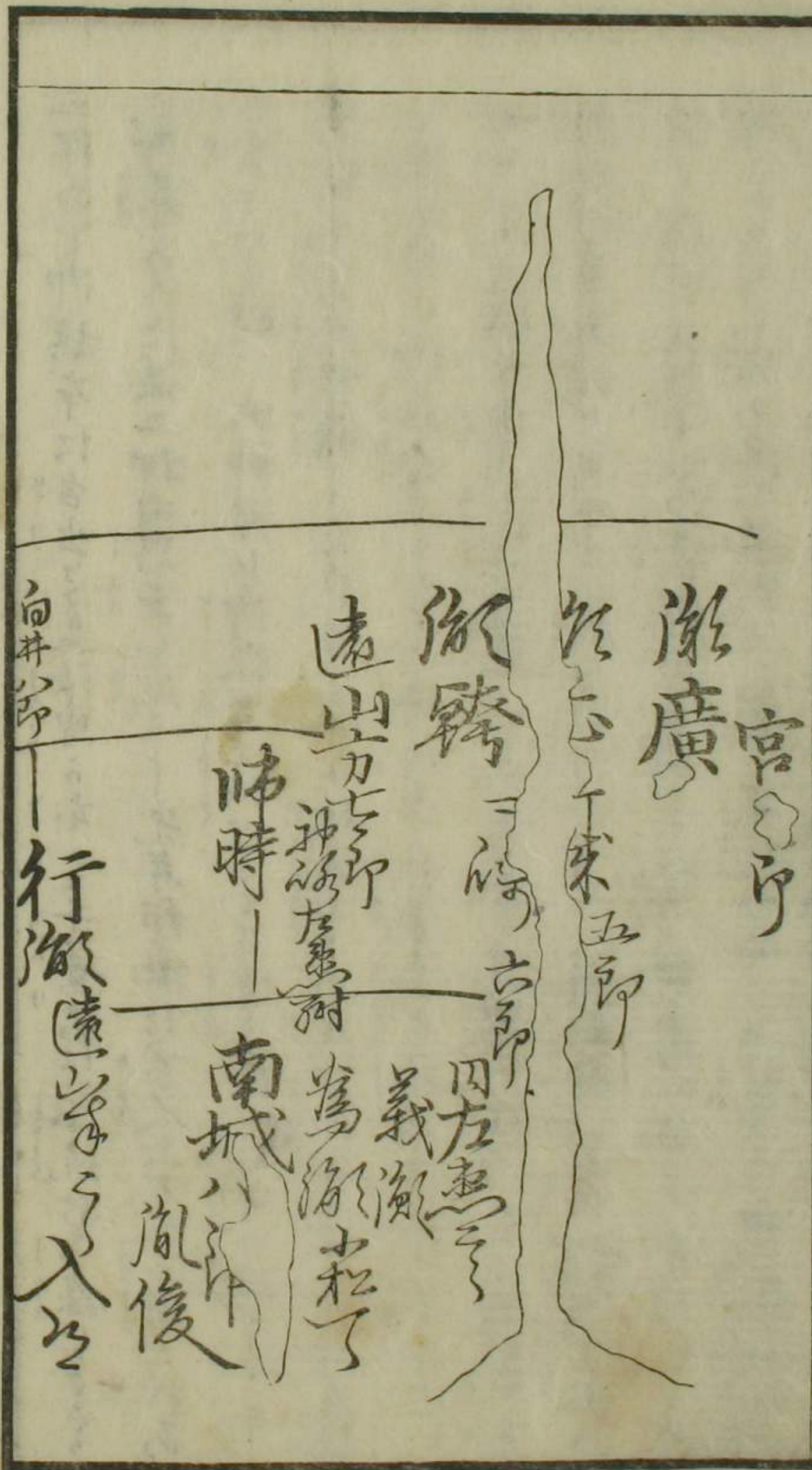
入て腹搔切て失ふける邦胤の息男千霍丸僅小六歳の義を社に藩第社家人小相議して先もて南方へ注進し氏政父子伺ひけり千葉治記小田原持佐倉ハ敵地小とさまを要樞の所なりとて臼井社城主原式部少輔胤成と佐倉小移し入社て軍代小定め千霍丸と小田原に招て家臣とも社人質とぞせり社々る後に新助重胤と号せし是なり老臣設樂左衛門尉相從て南方へ趣介輔してこそ居たりけり社千新丸の姉十二歳ふて有しと是も氏直社下知として其年の十月総州如島今社佐倉城の地なりと云処小新なる屋形と補移社てける中村雅樂介佐の臣と成て養育の功とこそ勵まけるまゝ千葉家小於て四老とて原圓城寺印播郡城村山園城寺本内鑄本社を圍城寺、武州石濱社千葉に属して総州と藤教其後三家老とな社り中にも原式部少輔ハ元是堂春の一様とて小金社高城源二郎胤則土氣社酒井伯耆守康治東金の酒井左衛門佐重政

秩父 余流を以て城持に旗下も手に属け大身なる士大将なるこの故小園東に
て下北上小優社たるたふ小葉首騎原は子騎の大將とも千葉に原原に
高城兩酒井とモ里悟に常談ありしと天正十八年小田原陣にとも千葉
鶴丸重胤の軍代として式部少輔胤成八千の人数と司て相州湯本口を
ちりたる。北條家滅亡して千葉家も没落せしに 大神君沖入國の
後式部少輔々母倅水佐後平内 滋弱たりしと沖旗本に召出は沖旗近習
の列小加へられしと天正教の宗門と信仰するは神科よりして慶長十九年
秋刑罪小處せられ断絶しけりとなし又千葉介重胤幼少小付て家
臣小佐倉が城と抱ふ事能はず本多忠勝酒井家治小園渡しけり以累
代の本領と離れて逐電しけり 大神君關東沖入國の後總州筋の素
内者小せりしと賢慮を以て彼旧臣海上海保を 三吉押田庄吉并印井の
原式部少輔胤成の子水佐東金の酒井左衛門佐重光前重政と云 子金

三郎おと沖旗本に召出され汝曹の本主千葉家に正統の子孫はなごさ
と御尋ありに海上押田思素を巡らし先年邦胤が家人士方へ主用されあ
り登りける時 大神君が沖使者上流せしとて途中にて公會口論して千
葉家人以外の狼籍したり事あり故又この爰と思召出され御遺恨
と果さるるに御存念小を心得違ふ邦胤美年横死小付て令嗣なし
女子一人北條氏康の息女が腹小これあるは達聽しけられさしもの豪家
断絶の事不便な事と仰られ件の女子に技助料を下し賜り重胤ハ
長く浪宰をたけり是併押田海上邪心に賢慮と抱りて申なせしに
據るるあり之良小忠の不忠とふり氣數の命こそ墓なきに或云東金左衛門尉政展秩父
の流ふあらぬ系遠江より出るとありと大州派の浪野を利の後と見えたり
土氣系金の先祖とあり○家系に重光なり政康の子ハ金三郎政成と云ふ

○新編鎌倉志五卷 千葉屋敷ハ天狗堂ノ東ノ畠ヲ云相傳千葉介常胤ガ
舊宅ナリ東鑑ニ阿静房安念司馬ノ甘繩ノ家ニ向ト云ハ是ナリ司馬

ト千葉成胤ラ云ナリ成胤ハ常胤ガ嫡孫ニ胤正カ子ナリ
 ○千葉氏系圖二種 △千葉系圖數種あり終とも善本ヲ終々余ヲ所見スルハ香取田所本
 水府松蘿館本頗る簡淨ト以テ又鑄本本四卷あり詳明トテ蓋
 難トシテ久ク終テ故小田所本松蘿館本ト附刻シ若クハ異同得失ハ言長ク終ハ畧シ



激盛 激重 廣瀨 激村

激氏 日守中左衛門右衛門直瀨長瀨

激信 激氏 朝氏 時朝 宗朝 日守中左衛門右衛門

日守中左衛門右衛門 激村 朝村 日守中左衛門

激村 朝村 日守中左衛門 激村 朝村 日守中左衛門

日守中左衛門

激信 激常

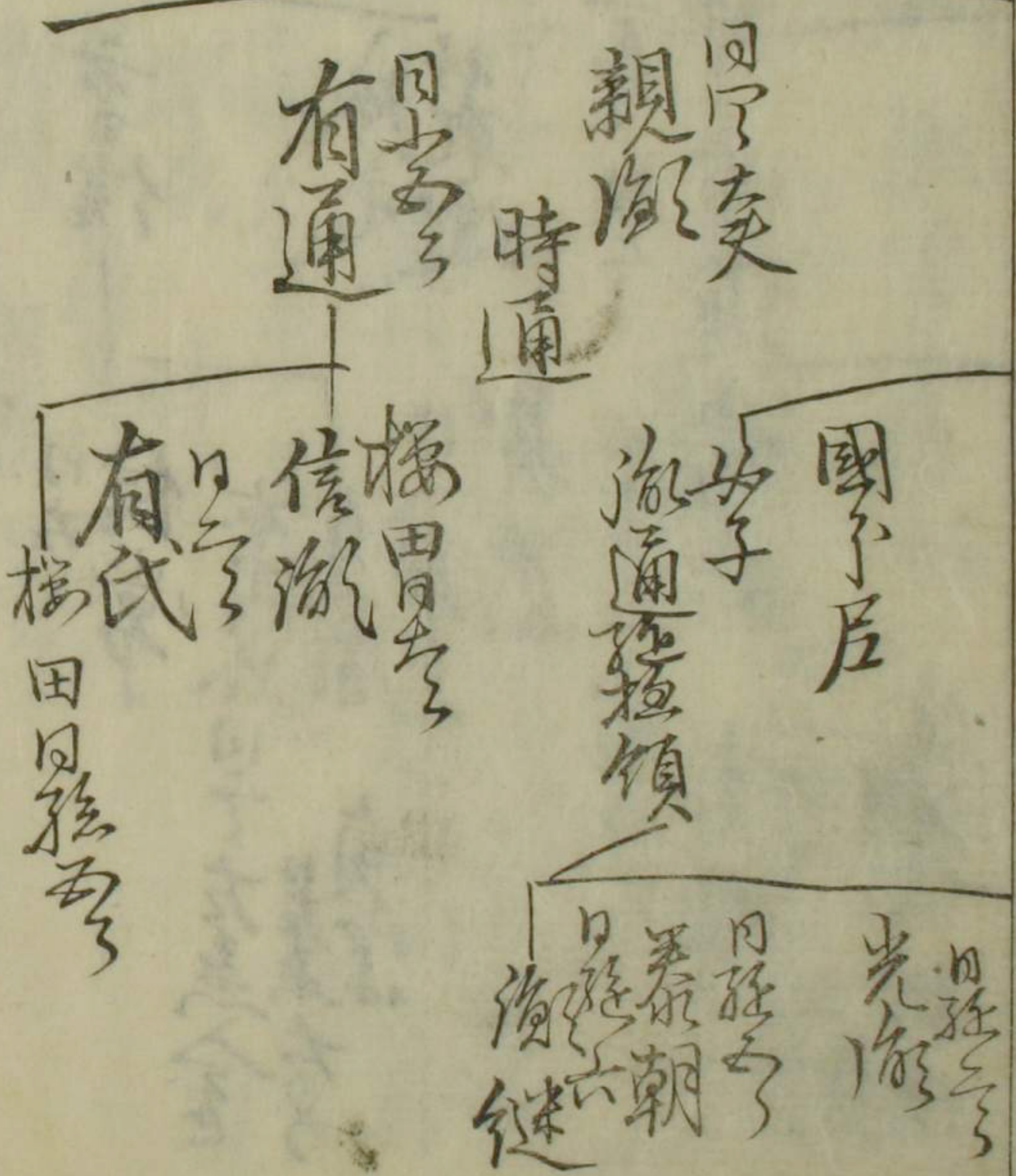
激信 激常 日守中左衛門

激信 激常 日守中左衛門

激通 激常 激朝 激朝 激朝 激朝

激朝 激朝 激朝 激朝

此系天正以前ノモノナルコト必セリ惜ラズ前後欠損シテ全カラス其全ヲ着シ人補テヨ



千葉氏系圖

相馬 武石 大須賀
國分 東

△千學集云屋形サ御紋ノ月星ノ以前ニ松竹ニ霞ノ丸ニ松竹ヲ御家ノ紋ニサレ鶴ノ丸ヲ海上ニ進上セケルカ後ニハ霞ノ丸ニサレオハニル云々

高棟王

△久安二年文書又永曆二年二月廿七日平常胤文書ニ良文經明忠經經政經長經兼常重トアリ是千葉家相續ノ次第ナリ

高見王

高望王

良望 常陸大掾

將弘

良房 常陸大掾

將門

良將 鎮守府將軍

將賴

良兼 上總介

良定

將平

良文 長田祖 村岡五郎 一名重門

將為

良生 常陸六郎

良繇 從五位上總介 鎮守府將軍 忠光 常陸掾 常高

良詮 從五位下 上野介

良持 從五位下常陸少掾 孫在九州 良海 田滿院入道

良廣 駿河十郎

將武 伊豆守

出現 兄同誅

良允

將國 信田小太郎 文國 小太郎

景遠 三郎 朝義

景光 貞元 子孫在九州

千世丸 父同誅元

女 如藏禪尼卒年八十余号常念地藏 世号地藏尼

忠賴 村岡次郎陸奥守從五位下 為將門智繼跡

為通 駿河守

忠通 村岡小五郎 大場梶原祖

良生 常陸六郎

良繇 從五位上總介 鎮守府將軍 忠光 常陸掾 常高

良詮 從五位下 上野介

良持 從五位下常陸少掾 孫在九州 良海 田滿院入道

良廣 駿河十郎

將武 伊豆守

出現 兄同誅

良允

將國 信田小太郎 文國 小太郎

景遠 三郎 朝義

景光 貞元 子孫在九州

千世丸 父同誅元

女 如藏禪尼卒年八十余号常念地藏 世号地藏尼

將常 秩父武藏守

忠常 武藏押領使 下總介

二 賴尊 山伏号山邊惡禪師 土肥祖大力

三 常將 千葉小次郎居總州千葉因氏烏 創建平山寺

恒親 安房押領使 恒仲

恒遠 賴任 村上貫有

胤宗 武藏七黨内野与黨祖 元宗

賴望 小太郎 常望 相馬小次郎

兼賴 小次郎 子非 將長 長望

重國 小次郎 始号相馬 胤國 次郎 師國 相馬次郎

師常 相馬小次郎 實千葉常胤二子養子 十才繼相馬領奥州行方郡下總相馬 郡元又二年十一月卒六十七或聲二作儿 四郎大夫武藏押領使源義家命名

常永 法号覺永又永元

恒直 植生次郎

基永 野与六郎

常兼 女佐竹左京大夫室
 常房 女結城集人正室
 賴常 原三郎 岩部五郎 粟飯原家督
 常益 粟飯原家督
 女伊藤大七室
 常慶 匝瑳八郎
 女 遠山小太郎室
 女 里見新左門室
 常通 父常長名代
 常景 兄常兼時打死
 常季 長南左門尉
 常盛 平山季高養子
 常時
 元宗

常兼^四 從五位下總權介号千葉大夫
 本郡檢非違使所法名觀者
 鴨根三郎或称千田

常房

常遠 安西七郎

常繼 大須賀八郎大夫

常時 相馬小次郎

元宗 周防八郎

近永 野与庄司

常尊 相馬六郎

恒永 奥州戰死

常範 佐賀次郎

恒宗 大藏次郎

常宗 岡濱祖

常國 次郎

常英 次良左衛

常定 衣山弥平次郎

常金 原四郎

常益 粟飯原

常能 金原庄司

胤隆 武射七郎

胤光 推名八郎

常秀 弥平次郎
 常勝 多谷八郎

常行 右京進

常直 近江守

常景

常家

常信 忠家 勝家

常定 佐賀民部少輔 勝重

常家 上總介

常時 同

常隆 同

常綱 匝瑳八郎

常賢 又廣 逸見八郎 小見九郎

常安 白井六郎

常重 從五位下下總介 法名照淨善應

常弘 匝瑳八郎

玄仙系

旧井常安 旧井二郎成常

六郎盛常 常清 四郎 太西胤常

左近將監胤 某 瑞洲山田應寺開山 某 六郎高胤

左近將監包 太郎冬胤 石之佐之胤

左近將監 四郎持胤 備前守俊胤

左三幸胤 太郎幸胤 左近又胤

肥後二郎常 越後了明 朱左之常 源玄宗悅 源左之常定 源左之常次

常衡 海上与市

常幹 海上

常滿 同

常繼 同

常直 同

常清 同

常朝

常景

伊北新介

常仲

常茂

印東次郎

常範

木内三郎

盛常

潤野四郎

維常

大推五郎

直胤

天羽庄司

直常

次郎

宇治會村
戰敗農介
小川系若狭
十氏家
小川系
シキアリ
郎布基基基

源左常林
源左昌俊
源左
少河系友十郎喜始
女友十妻
女友十妻
女友十妻
少河系縫友之常房
千葉玄仙教美

千葉三白井吉三在
源左常林
源左昌俊
源左

廣常

上総權介梶原景時カヨリ頼朝殺之
寿永二年十二月廿二日

良常

小權介
寿永二年十二月廿二日
鎌倉殺サレ

常清

相馬九郎

貞常

左馬介

胤親

角田太郎

親常

白井十郎

太郎

頼次

一名康常金田小太夫
三浦大介義明輝三十年絹笠籠成

次郎

女

伯耆少將平時家妻

常胤

從五位下千葉介下總守護職母常陸大掾政幹女元永元年戊戌五月廿四日生
建仁元年三月廿四日卒八十四法名淨春貞見 正六位上

胤隆

小見六郎

胤光

推名五郎

有光

太郎

胤正

千葉太郎新介法名常仙觀宿母秩父重弘女建久中奉頼朝余伐奥州大河兼任有
功建仁二年七月七日卒六十一居鎌倉竹谷永治十一年壬戌生

師常

相馬小次郎 為師國養子元久元年九月十五日六十七念佛行者無病而卒
合手念佛如眠

室治元年六月五日浦泰
 村誅秀胤妻泰村女弟也
 以故北條時賴會大須賀
 左門尉胤氏東中務入道
 泰還討之上總官大柳館
 秀胤積炭薪於館外四
 面及敵兵來襲縱火燒
 之編成甚熾不可嚮近
 秀胤令兵士發矢自其
 四子入室焚經而後自殺

胤盛 武石三郎

胤信 大須賀四郎

胤通 國分五郎

胤賴 東六郎太夫
 從五位下

日胤 居圓城寺号律静坊為賴朝侍同治承四年從以仁王軍奮擊力戰手殺六人
 遂戰死於光明山賴朝公治世之後為法事領寄附伊賀山田郷三井寺早

北條九代曰嫡子式了大夫時二男修理亮政秀三男左門尉泰秀四男六郎景秀

常秀 上總介左馬尉
 源平盛衰記作
 常平

觀秀 栗原禪師

能光

秀胤 上總介
 堺右京次郎

時常 植生次郎
 一作植

曾襲領父食邑植生庄秀胤
 奪之時常始而絕及聞秀胤
 遭難忽入大柳館与兄同自殺

秀時 式了大輔同父自殺

秀泰 植生修理介同父自殺
 一作垣

秀綱 五郎左門尉 同

胤忠 千葉五郎
 邊田

胤朝 六崎六郎

胤廣 千葉四郎

胤時 千葉八郎
 家号白井

胤成 千葉介建保六年四月十日卒
 五十七法名正阿弥陀佛

胤成 家号遠山形

景秀 六郎 同

太郎 六崎

胤義 千葉四郎太郎家号立沢

通胤 三谷次郎

胤村 三谷四郎

重胤 孫四郎

小四郎太郎

師時 千葉七郎

行胤 千葉七郎次郎
 家号遠山形

師重 千葉太郎
 家号神崎

義胤 次郎

胤俊 平田左門尉

胤信 平田次郎

一本胤宗作時胤
云時胤卒時胤胤
三歲故胤宗介胤

十五
胤宗 千葉介文永十一年八月廿六日卒年三十七法名長春常喜

十六
胤宗 千葉太即新介大隅守建武二年戰死於三井寺建武三年正月十六日三井寺戰千余將トノ二木戸ヲ破細川郷定禪力六十五トノ手勢ノ三百五十打

胤宗 千葉介正和元年三月廿日卒四十五

胤重 五郎

胤貞 千葉介元弘三五十六日始テ義貞三屬武藏金沢貞將ト武州鶴見ニ戰有功建武三

詮常 長門守 滿常 城介 教常 左馬介

滿宗 二即左門尉 義滿將軍ニ屬有功

胤定 長門守若州ニ暫居ニ後太平記四十卷將軍義昭信長ト確執ノ段ニアリ

胤親 胤時 民部丞

胤基 胤晴 左馬介 胤在 若狭權介

胤貞 大隅守屬南朝從西征將軍赴九州領肥前建武三年三月多良濱戰屬尊氏ト建武三年十月廿九日住三河死四十九女宇都宮公綱妻

胤高 千葉新介建武三正十六三井寺戰死

日祐 法花宗再興下總中山創建肥前松尾山應安七十九七十三死

胤鎮 千田弥二郎

胤繼 胤朝 肥前守

干法師 胤盛

乙法師 次郎

經胤 九郎

胤盛 元胤

教胤

胤資 胤勝

興常 實胤盛子 胤繁

三八
胤胤 千葉介天龍寺供養為隨兵善和歌新千載集ニス貞治二九十三日病卒於美濃年三十一ニ康永四八廿九日于時号新介

酉譽上人 幼名徳千代了譽上人弟子武州傳通院開山

九四
滿胤 千葉介志永世三六八日卒年六四法名道山弥阿弥陀佛号常安寺 氏滿 千葉次郎

常光 原次郎

常重 原次大夫

清常 五大夫

胤重 三大夫

重綱 三大夫

政常 三大夫

常尊 三大夫

貞常 系彩大夫

兼胤 千葉介修理大夫永享二年六十七日於鎌倉卒年三十九法名喜山

眼阿弥陀佛有四家老原田城寺牛尾高城也

康胤 馬加陸奥寺法名相常應

享德中源成氏与兩上杉戰屬成氏有功任千葉介康正二十一朔戰死上總八幡村年五十九首八送京泉東寺四塚

善胤 胤治

胤頼 實太宰少貳資光三男

胤誠 勝利 大和守

長良 刑ア太輔 家良 大炊介

常氏 對馬守

胤氏 多古

胤清 千葉右京大夫延文四七月筑後新少貳忠資三屬

義胤

胤滿 法名日園 胤春 千田 忘永廿日卒

滿胤 常安寺邊

兼胤

胤直 介道号 禾野寺

自秀 七郎千葉 介法名元三 孝胤

實胤 守胤

胤直 千葉介康正元八十五自為古河成氏自殺於下總多湖年四十二

法名常瑞臨阿弥陀佛号相応母管領上杉右佐氏憲禪秀女

賢胤 中務丞同先死母同 法名了心

胤幸 千田彈正 胤仲 千田力房丞

胤範 千田 法名道能 胤親 千田喜兵衛

胤嗣 千田 法名日嗣

高胤 小太郎 千葉介 胤房

胤連 千葉常陸介 九州住 胤平

胤親 介

宗景 上座

光胤 原豊前 寛正七廿七卒

實胤 千葉介後道世卒於美濃
上杉政實ノ婿

自胤 千葉介 文明十年攻下總
白井城取之遂領下總海上
武藏葛西石濱赤塚

盛胤 武州千葉中務
母上杉彈正

良胤 同次郎
号松月院

惟胤

胤持 康正二年六月二十日卒年二十三
法名大覺興阿弥陀佛

輔胤 竹慶岩檜殿 按二兼胤弟養子イニ介
延徳四十五日卒年七十三法名常阿弥陀佛イニ明応元二五日七十七

孝胤 千葉介 文安元生 永正二八十九日卒年六十二イニ三法名常輝眼阿弥陀佛
康正二父戦死ノ月十三日按三輔胤ノ子カ孝胤ノ生輔胤ノ二十八當ル

胤房 越後守

胤真 式ア大夫
胤榮 大藏丞
豊前守

胤将 早世新介

宣胤 五郎享徳四八十三日総州多胡阿弥
陀堂ニテ自殺

勝胤 千葉介享徳五廿一日卒六十三法名常歳其阿弥陀佛有三家老原鳴矢木木内之

幹胤 文明四生 永正年四十二當ル
常陸人鹿島左ノ尉養子 兵法名人

勝清 常陸人推崎五郎養子

久胤 勝胤同母生半身偏枯
家臣公津左近大夫養子 信胤 公津平内左ノ

昌胤 千葉介天文十五正七卒年五十一
法名常天法阿弥陀佛 利胤 千葉介弘治三八月七日卒年三十一法名
常賀覺阿弥陀佛

胤定 千葉鳴戸八郎
兵ア少輔

胤富 享禄四生
実利胤第三弟

良胤 千葉介多病ニ
ヨリ第三ツル 當胤 知胤
邦胤 重胤

親胤 千葉介天正七五四為北條氏政害之元年十七法名常圓一依原逆心生害利胤第四弟
一男小田原氏政命家臣生害
胤富 千葉介天正十三五七年五十五一三二利胤第三弟七年五月四日法号重アミ
一富胤

邦胤 千葉介
天正十六五月乘醉斬家士銀田万五郎還テ創ラ病創死

重胤 千葉介介母上野岩松氏寛永十年六十六日卒江戸五十二

女 母小田原北條氏

相馬

師常 相馬小次郎

義胤 五郎

常家 矢木六郎

行常 戸張八郎

春胤 氏ア夫入有

頼泰 次在る尉

胤盛 一在る尉

胤經 五郎 左兵衛尉
法名茂林

胤綱 小次郎
一継

胤家 矢木式大夫

忠胤 九在る尉 上野介子三人

時綱 七郎

胤景 一在る尉
胤宗

胤村 相馬孫五郎在る尉永仁二年卒
任將軍頼嗣宗尊

胤氏 次郎左門尉下總相馬
又作氏胤

胤顯 彦三郎

胤重 四郎

有胤 五郎

師胤 松若丸彦三郎奥州相馬祖
左門尉

胤朝 八郎

胤實 十郎

胤通 余市

胤門 彦五郎

胤氏 胤忠 下總相馬祖
師胤 重胤 奥州相馬祖

胤基 次郎左門尉

胤重 四郎左門尉
射手

胤忠 次郎左門尉
下總相馬祖

胤長 小次郎左門尉

忠重 四郎左門尉勢兵精射建武二年
山門之役属官軍与本間孫四郎源資
氏同射賊兵大顯名

胤宗 小次郎左門尉
資胤 上野介
月桂

胤儀 左門尉法名在桂

胤高 左近大夫法名幸山
上野介

胤實 彈正忠左門尉法名正安

胤興 三郎三田彈正常陸介 家紋巴

胤德 小次郎下總守号宝珠卷 三子アリ

胤勝 三田彈正武州三田庄將門宮建立

興秀 師岡次郎

胤定 三田彈正 政定

胤廣 修理亮因幡守法名天桂

行胤 弥次郎
朝胤 次郎兵衛
女 号鶴夜又治胤母也

重胤 弥五郎孫五郎胤門養子建武
二年國司合戰属斯波三郎於
葦堂忠死法名欽叟

親胤 出羽守

光胤 弥次郎
建武二月奥州打死

胤頼 治部少輔松鶴丸
讚岐守

憲胤

千代王治了少輔法名洞岩

胤弘

孫次郎讚岐守法名道空

重弘

長門守

高胤

出羽守法名大雄

盛胤

大膳大夫

顯胤

嶺岐守

天文十八二死雄公莫宗

盛胤

彈正

義胤

長門守

利胤

大膳大夫

胤貞

小次郎法名花桂世々總州相馬住

胤清

小次郎左近大夫

整胤

小次郎天正十七六月十八日為家臣生害

治胤

左近大夫法名了山

秀胤

小次郎法名春山仕家康公

胤信

天正十八年召出サレ五千石

盛胤

信濃守法名中岩

政胤

小次郎大坂御供

貞胤

同

某

小平二

義胤

大膳亮

慶安四五日卒三十二

勝胤

長門守安土屋氏了少輔

忠直次子後改忠胤

貞胤

出羽守

武石

胤盛 武石三郎

胤重 次郎入道

廣胤

三郎左門 文忠比

胤村 二郎左門

朝胤

四郎左門

長胤 小二郎七郎入道
相摸守時賴逝去弘長比千葉介頼胤同時

胤氏

宗胤 肥前守佐木遠江守氏信女嫁

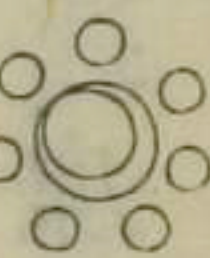
五郎

胤繼 孫四郎左門尉
奥州船迴人戰討死

胤道 武石五郎 但馬守

大須賀

旗紋



幕紋 鹿



胤信

大須賀四郎建曆年和田義盛乱有功賜甲州井上庄

通信

二郎左門尉
早世

胤季

多部田次郎左門尉
秀

胤村

荒見小四郎

朝胤

胤朝
同太郎

重信

奈古谷七郎左門尉

信常 胤
太郎

範胤

宝治乱三浦黨於法花堂自害
成毛八郎改君島十郎左門嗣胤
移下野

貞康 二郎左門尉

宝治乱泰村打後奔下野依宇都宮頼
綱居本州君島郷改氏弘長元年辛酉
八月七日卒五十八法号道昌

時綱

四郎左門尉 法名宝蓮

胤光

一本成胤元則泰了

成胤 左門尉三浦行泰女

貞範 祖母并左京介

胤時 十郎 正六位備中守六郎

建武三月參河矢作戰改義貞賜
感狀曆元八月十六日五十六卒号長基

富高 岡本信濃守
六月十七日越後芳賀禪賀三属
足利基氏兵岩松持國方郎木金井新
左工門卜組元刺違死

綱胤 備中守母守都宮時綱女
觀忘二年薩陸山戰属尊氏有賜感
狀十月与桃井直常長尾左門尉戰死
上野那和郡死三十三号道慶

胤重 風見新右門尉

胤景 大宮兵了少輔

胤光 延生二郎左門尉

女 茶師寺三川守紀綱之妻

泰胤 四郎 從五位下備中守
母守都宮氏家盛綱女
延文三月廿日二十八才卒道謹

知胤 四郎備中守母益子出雲守紀貞正女
明德三月三十日甲子号道慶

常光 胤泰 胤元

胤兼 五郎左門尉
法名宝胤 宗兼 又五郎

師胤 弥五郎 胤親 左門尉

胤春 彦四郎

又五郎

光胤 三位房

胤時 掃部左門尉四郎

胤連 四郎左門尉 行胤 左門尉 胤義 四郎

遠康 氏胤 四郎

頼孝 孫四郎 胤頼 四郎二郎

貞泰 五郎 行泰 四郎

胤繼 左門二郎 朝胤 孫二郎

胤頼 六郎 良胤 郷房

春胤 四郎 胤盛 又次郎

氏頼 金房丸 弥二郎

胤繼

胤房

胤元

四郎備中守母備中守綱經妹
忘永廿六月廿三日三十三号道清

秀胤

平次郎備中守母守都宮基綱妹
忘永三十四月三日卒五十五号道喜

貞久

祖母井信濃守

光胤

三郎備中守母梶原彈正女
長祿元五月十日四十九号道哲

女

長山修理亮忠好妻

茂胤

八郎備中守母塩谷左門大夫義孝女
文明十四月十六日三十五号高

定胤

七郎備中守母今泉但馬高光女
永正四六月廿四日四十二道白

胤家

六郎備中守母生上總介義雄女
大永七七月八日三十二道高

女

神山下總守綱藤妻

胤氏

次郎左門尉法名信連寬文五丁未六六日
上總介打手大將上總一宮大柳館ヲ攻秀胤
ヲ打取
次郎

師氏

時通

信康

五郎左門

宗常

四郎左門

為信

六郎左門

為胤

二郎左門

景氏

賴氏

朝泰

左門尉

顯朝

朝氏

新左門尉法名信圓

廣胤

太郎左門尉母壬生美濃守高宗女
天文十九月廿七日那須戰死於
五月女坂年三十三道榮

慶繁

僧守都宮光明寺及桂連寺開山

女

戶祭下總守妻

高胤

五郎備中守母芳賀利大補清高女
慶長二六月十五日五十八号道山

高範

左馬亮

胤次

太郎左門尉

女

益子左京亮妻

胤泰

朝泰

時朝

二郎左門尉法名禪信

宗朝

下野前司
法名信宗

宗時

下總守

宗信

越後守
法名生應

憲宗

左馬助

高晴

三郎
慶長中於上三河戰死

晴胤

又次郎
寬永元十月十三日三十八
道聚

照胤

熊之介
母櫻井氏

興胤 大須賀十郎
母高橋氏
胤方 君島六郎

國分

胤通 國分五郎

有通 小五郎 号村田

常義 同六郎 大戸矢作領主

胤實 太郎 胤長 又太郎

常氏 六郎

胤義 平太 号大戸川 定胤 平太六郎

行常 六郎五郎 行泰 五郎七郎

七郎五郎 龜王九

常通 同次郎

重常 小次郎

朝胤 孫二郎 号松沢

朝俊 孫四郎

光胤 孫五郎 胤秀 又五郎

胤盛 孫三郎

泰朝 孫五郎

胤門 六郎 胤貞

常朝 小次郎 法名悟連

竹王丸 彦五郎

長胤 又六法名了性

胤村 彦次郎就外戚所領

泰胤 号春社彦六郎号天作惣領

通泰 八郎

胤氏 孫六

治時 十郎

氏胤 余一

胤任 小六郎

弥五郎 鶴金丸

朝綱 弥五郎 松沢惣領

余五

胤重 余五 法名蓮性

道光 僧

理法

事法

胤連 彦五郎 法名宗常

明鑒 郷阿闍梨 又号公一

幹胤 太郎

胤幹 彦三郎 御房丸

信胤 五郎太郎

師泰 孫五郎

朝通 彦五郎 法名信聖

胤幹 六郎

賴泰 七郎

胤賴 孫七郎

賴通 十郎

賴覺 大進房 本名淨一

盛村 小五郎

小六郎

又五郎

宗通 彦六郎

胤朝 孫五郎

胤頼 孫六
乙若丸
千代若丸

東

胤頼 東六郎大夫一後五位下

重胤 太郎兵衛尉法名覺然一平太武者所兵衛尉入道
太納言為家右大臣實朝歌道傳授

元久元正月廿二日白山重忠討伐ノ氏大將北條義時先陣葛兵衛尉後陣堺平二入常秀
大須賀四郎胤信國分五郎胤通相馬五郎義胤与重胤武藏国二俣川三戰有功
壬四月廿七日父弱冠ヨリ祇候ノ例ヲ以致望勤任建保二甲戌七月廿七日大倉石大慈寺供養隨
兵六年戊午五月廿七日右大將鶴岡拜賀隨兵七年己卯正月廿七日將軍右大臣拜賀隨兵

胤朝 木内下總守承久二年六月十四戰有功但馬磯部在淡路由良庄惣領号次郎

胤康 風早四郎入道
承久二六十四宇治有功

胤光 小見六郎

真舜 金蓮房

康常 太郎左門
康元丁巳十月八日大慈寺供養隨兵

為康 次郎
頼康 孫四郎

貞泰 彦四郎

榮尊 胎蓮房

時秀 泰宗

胤家

木内次郎磯部庄傳 寛元二甲辰八月十五日鶴岡供奉

景胤 弥次郎

胤時

同四郎号小見由良庄傳 按下總四郎一考 東鑑寛元四年二見二

胤直 同四郎 法名道源

胤長

同五郎

胤氏

六郎号虫幡

胤盛

本名時信号油田七郎法号道胤

胤俊

八郎

成胤 八郎太郎

胤光

九郎号田部

泰胤 弥九郎 法名一祥

公胤 八郎二郎

九郎次郎

胤定

十郎

胤祐 余次郎

行胤

同余一

幹胤 孫次郎

胤持 彦五郎

胤忠 又次郎

信元

惟胤 彦次郎

胤長 十郎元弘三月廿三日鎌倉葛西谷戰死

滿犬丸

義胤

七郎次郎

胤元 小六郎

胤繼

弥七郎未分配田立惣領

胤信 彦七郎

胤持 弥七郎 法名撰阿

胤定

式部房

胤教 孫八郎

胤清

小六郎法名良清

祐胤 六郎

胤貞 又六

盛胤

六郎四郎

圓胤 彦房

祐潤 大夫阿闍梨

静胤

郷房

胤光

胤顯 孫八

胤次 六郎太郎

胤義 又次郎

胤成 弥九郎

有胤 四郎次郎

胤久 六郎

圓祐 大輔禪師

樂胤 弁禪師

胤貞 小六郎
改胤勝

妙然 六郎入道左門尉
黒衣

胤盛 彦四郎

胤景 七郎

宗源 覺性房

胤家 弥六

胤勝 八郎

胤氏 中務丞

貞胤 六郎右門尉
改清胤

胤宗 三位房

政胤 八郎

胤繼 六郎

宣胤 小次郎

政胤 孫四郎

胤氏 又四郎

胤行 一三從五位下為家歌道相傳東鑑建長四年中務少輔胤重考
中務丞法名素暹一六郎中務入道
承久三年巳六十四守治戰美濃國郡賞元

胤方 海上次郎法名道胤建長四十二年七月七日
父子隨兵胤方為後陣

胤久 四郎

胤有 海上五郎 森戶領主

安貞戊子七月廿三日駿河前司義村田
村庄渡御隨兵寬元二甲辰八月十五日
頼嗣鶴岡放生會御覽供奉仁治四年
癸卯七月十七日御所詰番聚

兼胤 五郎九郎

胤國 彦次郎

泰行 因書介法名行暹建長五十七日雖撰隨
兵先之婦國不如例

義行 四郎建長三年辛亥二所進發隨兵

素源 六郎左門入道

顯信

盛義 六郎

胤義 孫六

重義 七郎

胤見 孫六 治胤 六郎

胤豐 兵庫介

盛胤 本庄氏東七郎法名妙覺

長胤 海上四郎

行胤 中務丞 号船木 法名理一

胤世 七郎太郎法名良圓

朝胤 号边田 六郎法名慶胤

資胤 高上弥七 法名理慶

胤基 松本九郎 法名善覺 建曆三月三日和田義盛乱打死

九郎

胤景

阿玉郷主海上弥次郎左門尉備中守 建長四月十七日將軍鶴岡供奉先陣隨兵弘長三月八日來十月二日必定上洛供奉隨兵註文

胤行

胤朝

胤康

胤景

胤泰

胤長

本内下總次郎 海上亦次郎 海上祖

風早四郎

弥次郎備中守

佐竹遠江守貞義妻 刑了大輔義篤女

胤文 馬場十郎法名見一

胤門 弥十郎法名伴阿

胤郷 又次郎

秀胤 胤清

親胤

有胤 七郎左門尉法名成高

胤俊 叔父理慶跡續

胤茂 法名定意 建武二宗胤三屬為官軍有功

直胤 中務丞法名秀海

教胤 横根郷主太郎左門

胤泰 海上惣領六郎左門

師胤 筑後守法名理性

女 佐竹義篤女

公胤 八郎法名理慶

憲胤 筑後守志永禪秀乱 属持氏有功

信濃守

胤貞 長谷左門五郎

胤忠 胤顯 常陸介

八
胤名 六郎中務少輔

胤國 東孫太郎先父早世

高胤 孫次郎下總守之長

朝胤

資胤 高上弥七 理慶

胤基 松本

胤文 馬場承久元巳卯 右京權大夫義時大 倉亭入御供奉隨兵

行長 助二郎丹後守先父死 八月廿在兵三尉弘長三素暹追善懷帑之經ヲ書ス將軍夢想ニヨツテ也

胤長 一仲隨兵ニ撰ルル先歸國依テ不例

胤廣 常陸六郎

幹胤 弥七

胤勝 權太郎

為胤 小四郎 信阿

胤名 四郎左門尉 等阿

秀胤 三弟 弥八郎掃部介宗永 栗野郷領主

胤名 弥七郎 一三香

有胤 弥七郎左門尉成高 叔父資胤養子

胤俊 左馬介 祖父実阿跡

廣胤 七郎又阿弥土丸重名 阿土丸早世

胤家 幸満丸 甥廣胤跡

有胤 七郎左門法名成高 実高胤子

胤長 一仲隨兵ニ撰ルル先歸國依テ不例

胤是 中務

胤行 一本

胤重 中務少輔 下野守素通 後行氏

胤耀 六郎

泰行 四書介

胤秀 次郎左門尉 先覚

胤元 左京亮完全

義行 四郎

胤氏 出羽守

胤村 六郎左門入道素源

胤光 六郎 本満胤

胤女 歌人前刑部少輔忠成朝臣室忠成三浦 泰村一味毛利入道西阿為同意然レ氏 胤行一官ノ功ヲ賞シ當歳ノ小兒ト氏ニ 胤行ニ預ケラル

胤壽丸 六郎

胤行 一本

行氏 從五位下野守 古今相傳 素道

時常 素阿三 新續撰作者

常顯 從五位下中務大輔下野守 法名素英天龍寺供奉供奉人 元弘三年四月六波羅籠城衆ニ東三郎左 二門尉氏時アリ可考淡河左京亮通時 二屬ニ東寺西七條ニ陣シ赤松因心ヲ打

胤女 歌人 續拾遺作者

胤村 平大 素源 新續拾遺作者

師氏 從五位下下總守明德三相國寺供養隨兵
五人內弟二番志永廿九年卒

胤綱 改益之後五位下式部少輔下總守
素明

氏數 從五位下下野守宗玄

元胤 三郎早世
妙童院 常慶 下野守

常菴 和尚木蛇寺

氏胤 中務官內少輔
素珊

常縁 從五位下下野守素曉又素傳

時常 氏村 常頭 師氏

總州東庄三十三鄉并美濃郡上郡在城
自承久二至文明志仁乱ノ并關東下向向
為齋藤妙椿攻落常縁詠和歌妙椿
二送ル敵感之以城ヲ帰ス古今集令傳
授公家無双歌人

常縁 前車後車語集三葉
常兼十三代 尚慶 下總守

頼數 官內少輔
素光

頼數 元胤 六郎 常慶

常和 左近大夫 胤氏 素純歌人入集
山里ハ心ツシモ
ナラサミモトク
木向ノ秋ノ
夜自

女 盛數妻 胤縁 遠藤新兵衛
實盛數弟

頼房

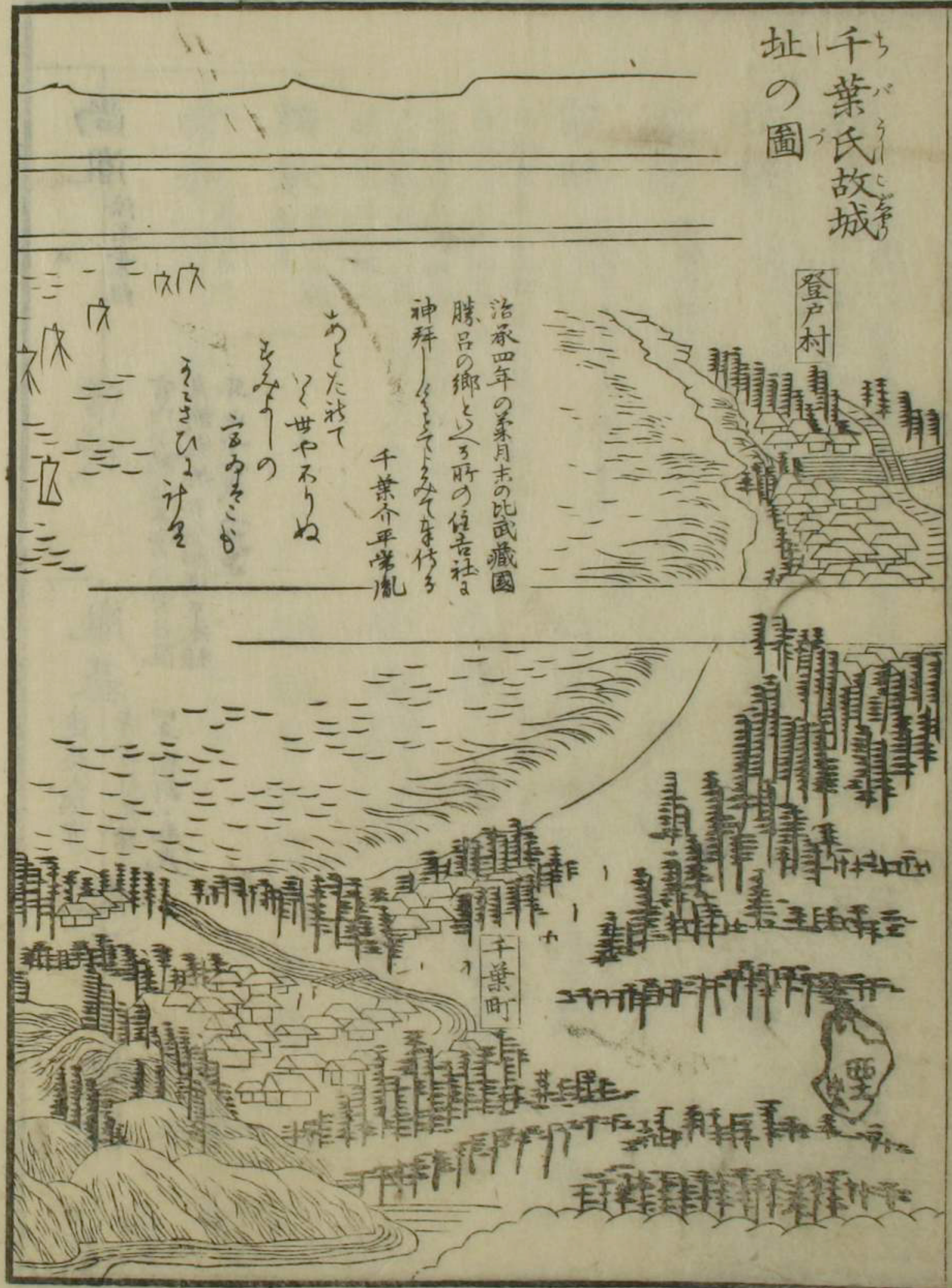
盛數 實遠藤新兵衛胤好子
婿養子初東後遠藤

尚胤 法名素經

常氏 官內少輔法名素山壽昌院
自為家郷古今相傳至永祿
年中十六代正統也

胤基 遠藤大隅守 秀言三任文祿
四年朝鮮ニ病死 胤直 慶隆

千葉氏故城址の圖



○成田恭詣記卷四



○千學集小大治元年丙午六月初一めて千葉と立つ凡一萬六千軒なり
 表八十軒裏八十軒小路表裏五百八十餘小路之曾場鷹大明神より御達報
 稻荷の宮は御前まで七里の間御宿之曾場鷹より廣小路谷部田々國中
 此諸侍の屋敷を是は池田鑄本殿の堀内より御宿八門之宿の東園城
 寺一門家風たがひ宿は西原一門家風たがひます橋より向御達報を
 八宿人屋敷より出さふりて河向と市場とをより千葉の守護神は曾場鷹
 大明神堀内午頭天五結城の神明法蓮報の稲荷大明神千葉寺の龍藏
 権現是なるを弓箭神と申妙見八幡摩利支天大井是なり千葉御神事
 大治二年丁未七月十六日より始りたり常陸御代御事之御幸假屋ハ神
 主ハ人社家ハ人乙女四人御祭は御舟ハ宿中の老若に役なり供物ハ千
 葉中野十三貫とらへ同関錢諸侍衆上げ申一関ハ假屋の供物と神
 主にとらせ一関ハ老若小とらせ御祭と勤りて結城舟ハ天福元年

癸巳七月廿日より始りて時亂の御代御事之御後下御送の御舟なり
 結城の村督小安倉出雲守と申その永鏡にめ小取立しその結城今
 此寒川なり大治二年御神事始り天正二年甲戌まで凡三百四十年之
 ○東路ははせに十四日十五日千葉の崇神妙見の祭禮とて三百足の早馬代
 見物之云くと又の千葉の集は信しとてさふとら社と考時
千葉家の大根と觀るに五三の代はけつなり
 龜澤山清光寺 元佐倉村小あり寺領五拾石 天正十九年 淨土宗江府三縁山
奉介十月
 末なり奉尊ハ阿弥陀如来園山と月峰上人と云寺は傳ハ天正中二世無算師
 大樹寺殿は御齒骨を負園東下り所々遍歴いたされ一処園縁ありと
 寺に任せられ山内清浄の地を擇み埋葬せられ其後 神君東金
 鷹野の御冬算和尚當國在任の由園台を御尋ふ付即東金御伺
 小藏りりて御齒骨此地に埋葬は御申上依處御感の上東金より當山
 御入りと終り御一宿遊ては御齒骨御廟御來治法墓とらへに厚

朴と植をせり此ハウの末ハ子孫長久の基瑞祥の靈樹なるを依り此儀
 一と云く五垣ハ慶長中土井家にて建立せられしを代々佐倉領主持
 たり 城中之塚と字せり他ハ清水と云
 あり万代殿供養の用にせり云

同所藏佛阿弥陀如来銅像背面識 長一尺 六寸許

橋氏女橋

同觀音銅像背面識 長一尺一 寸五分

鄭智光念管厚田阿定阿道阿

順阿

慶範并妙圓感助定慶手代順阿

沙弥西心

正安二年九月日額阿道田

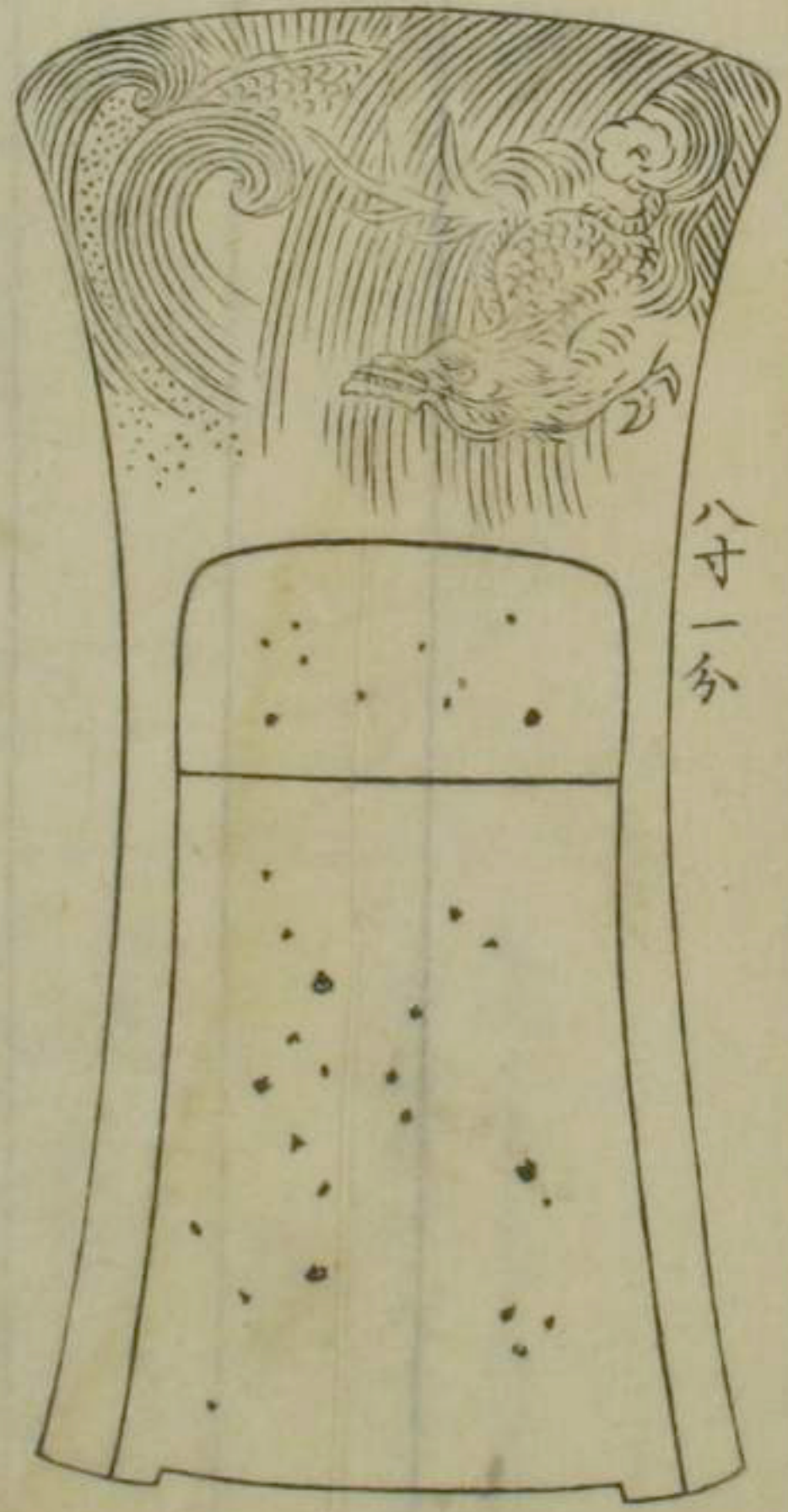
平氏女

綯モア道阿

同所藏古硯 石質金眼アリ



目ヤリ心



常歳山勝胤寺

大佐倉村あり寺領廿石 天正十九年 辛卯十月 禪宗曹洞派土室

祥鳳院末なるを本尊釋迦如来基享禄元年千葉介勝胤 天正廿二年開

山華翁祖芳和尚 天正廿年十月 域中千葉家代々の墓碑數基あり勝胤以

来のも此を以て鑄字なる此ハ其詳なることハ知る處うらけ 庭内小池
 あり千葉水と号し一古杉ありまきと掩へり 當時寺領七十五貫文附に終りし
 總之下州印播郡大佐倉村常歳山境内地藏堂 残欠の古簿小のすま佐倉風土記見ゆ

地藏堂鰐口識

鰐口

壹箇

正徳五年六月吉錦貫夏右衛門尉平政春喜捨

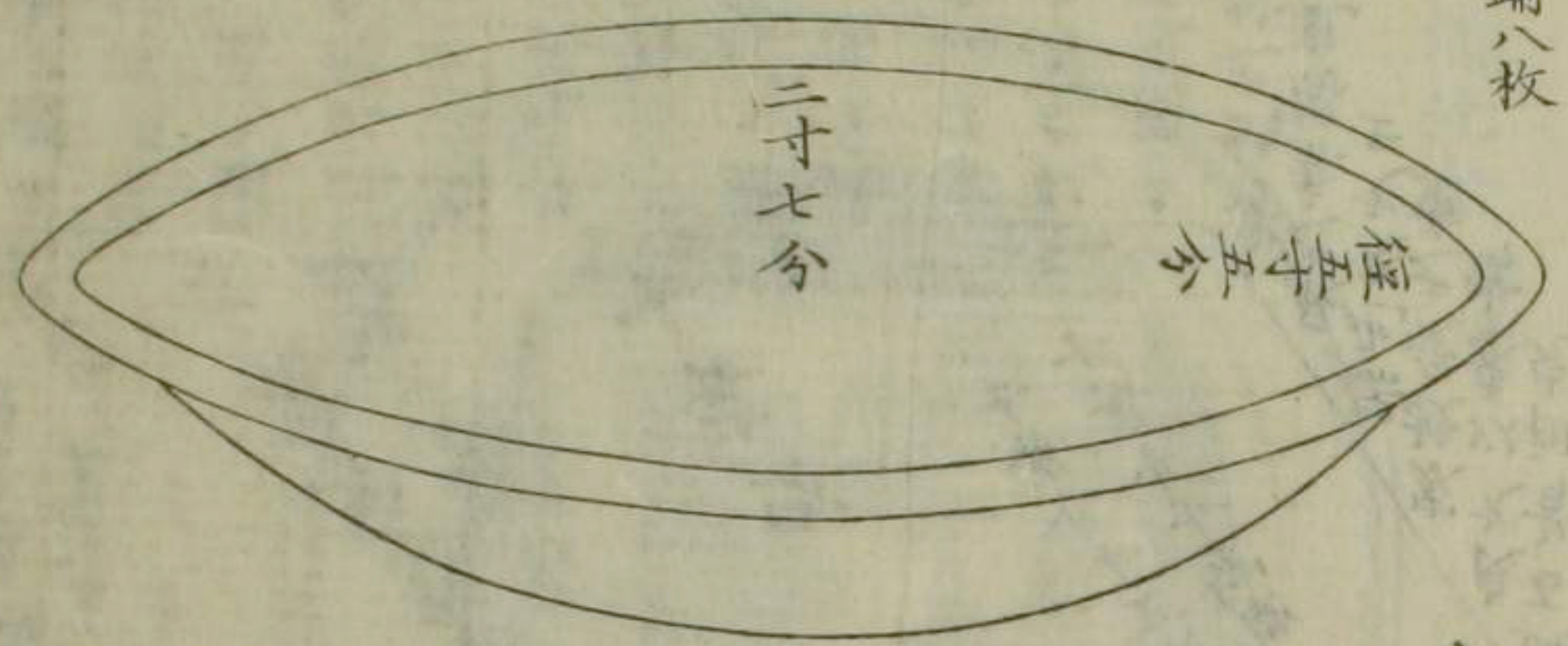
所藏教授文 黃銅筐入此三行其一班之
八寸三分

教授文

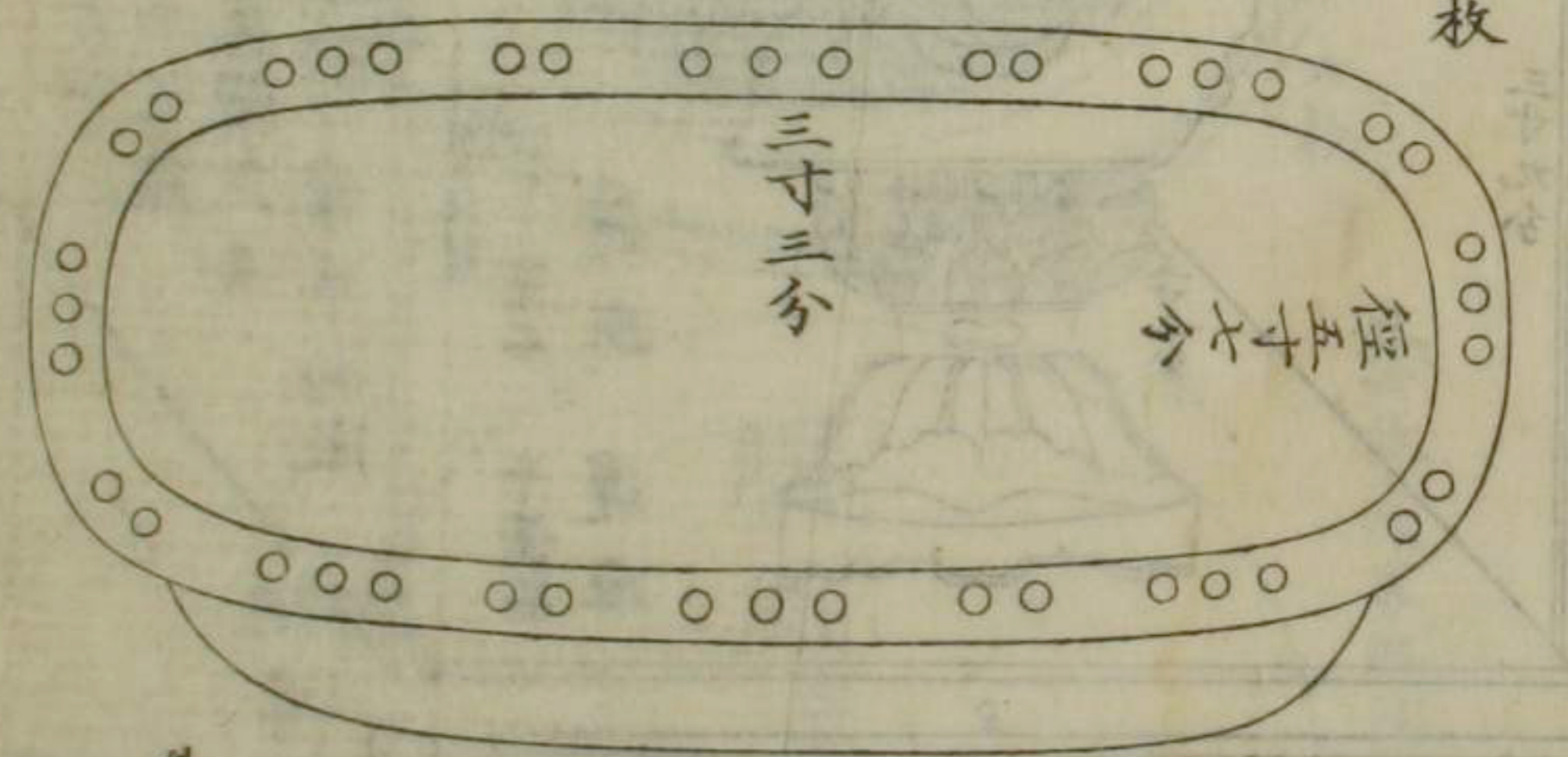
夫諸佛大威者諸佛之所護念也。有佛、相授有祇、相傳。嗣法超越於三際。證契連綿於古今。吾大師釋迦牟尼佛陀附授吾迦葉。

千葉家陣皿 地金真鍮
至テラスシ

真鍮八枚

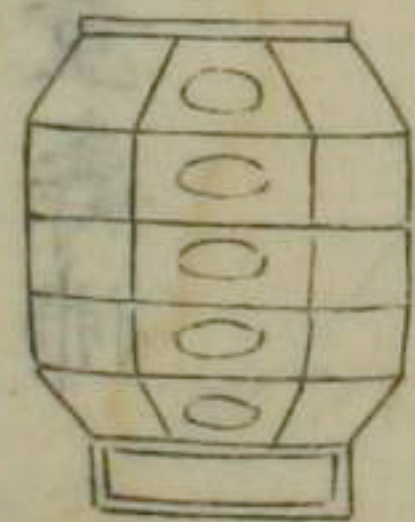


真鍮十枚



朱漆沈金三重り高八寸徑八寸
上唐繪樓閣人物中種繪り

組重



底

從五位平朝臣

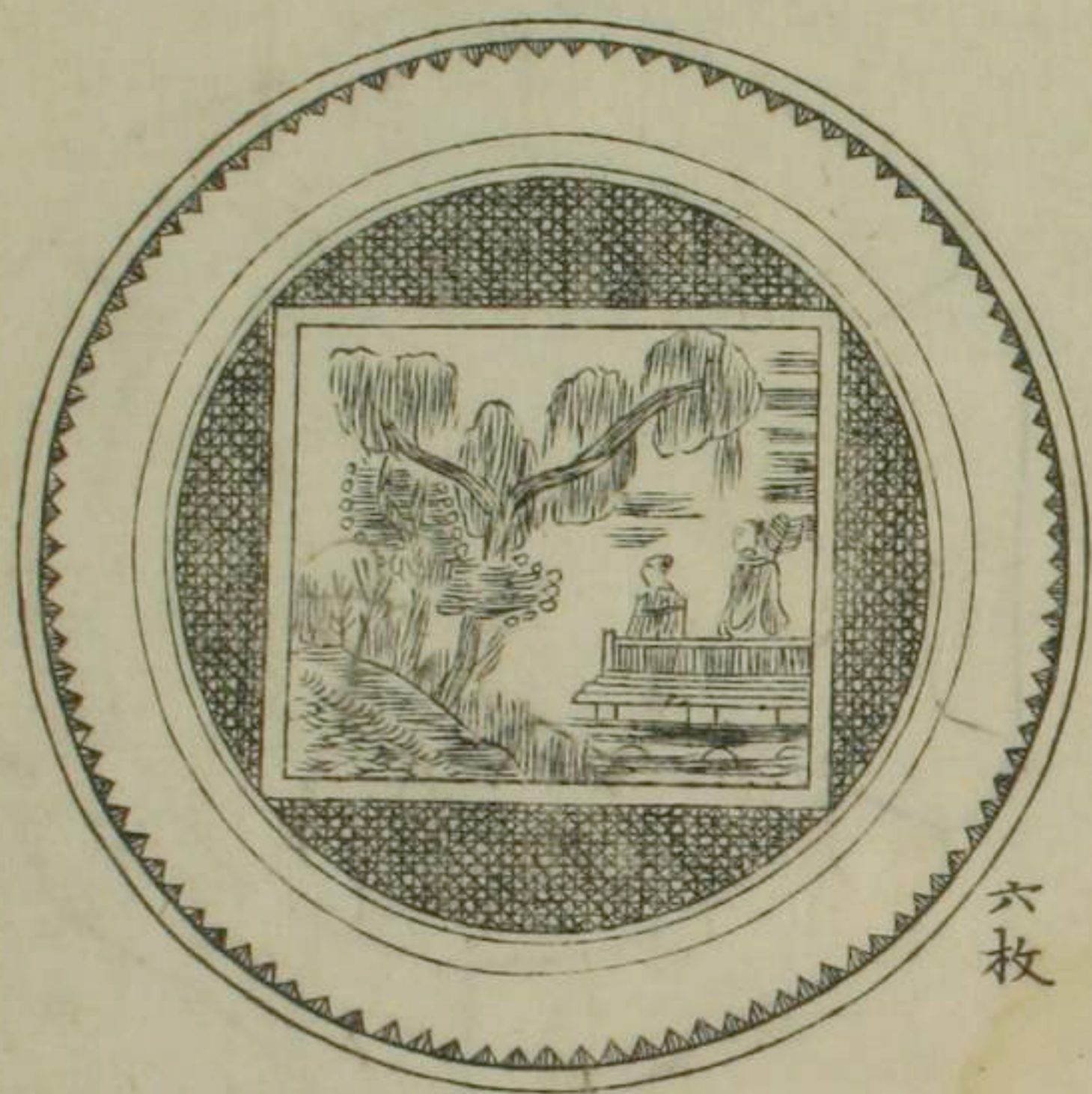
勝胤寺公用 徑寸

笏室置之

外ニ
九穴貝石濱栗 龍馬角
天狗爪 漆付細口ホアリ

同木皿

朱漆沈金 徑五寸



六枚

底

勝胤寺

鐫木長門

墨之

外六枚底墨漆沈金繪亦異ナリ

徑三寸二分

石也蓋且文辭也非收
 遠之萬也非收
 納其而安石
 運新工鑄而
 鑄新伊藤而
 尚哥住方字和
 常紀矣周十
 守納勝胤
 守春之胤
 胤之大重
 胤之胤
 胤之胤
 胤之胤

在子家尚胤自
 寬文壬子仲春吉辰
 千葉介平正胤
 妻真壁氏女
 嫡嗣千葉平尚胤

蓋裏
 寄納銅函式箇
 千葉石
 常齋山勝胤寺

千葉石
 蓮座
 蓮座
 蓮座
 蓮座

三寸九分
 五寸二分

無量壽佛

鏡
徑三寸九分
厚一分五厘



外徑寸五分

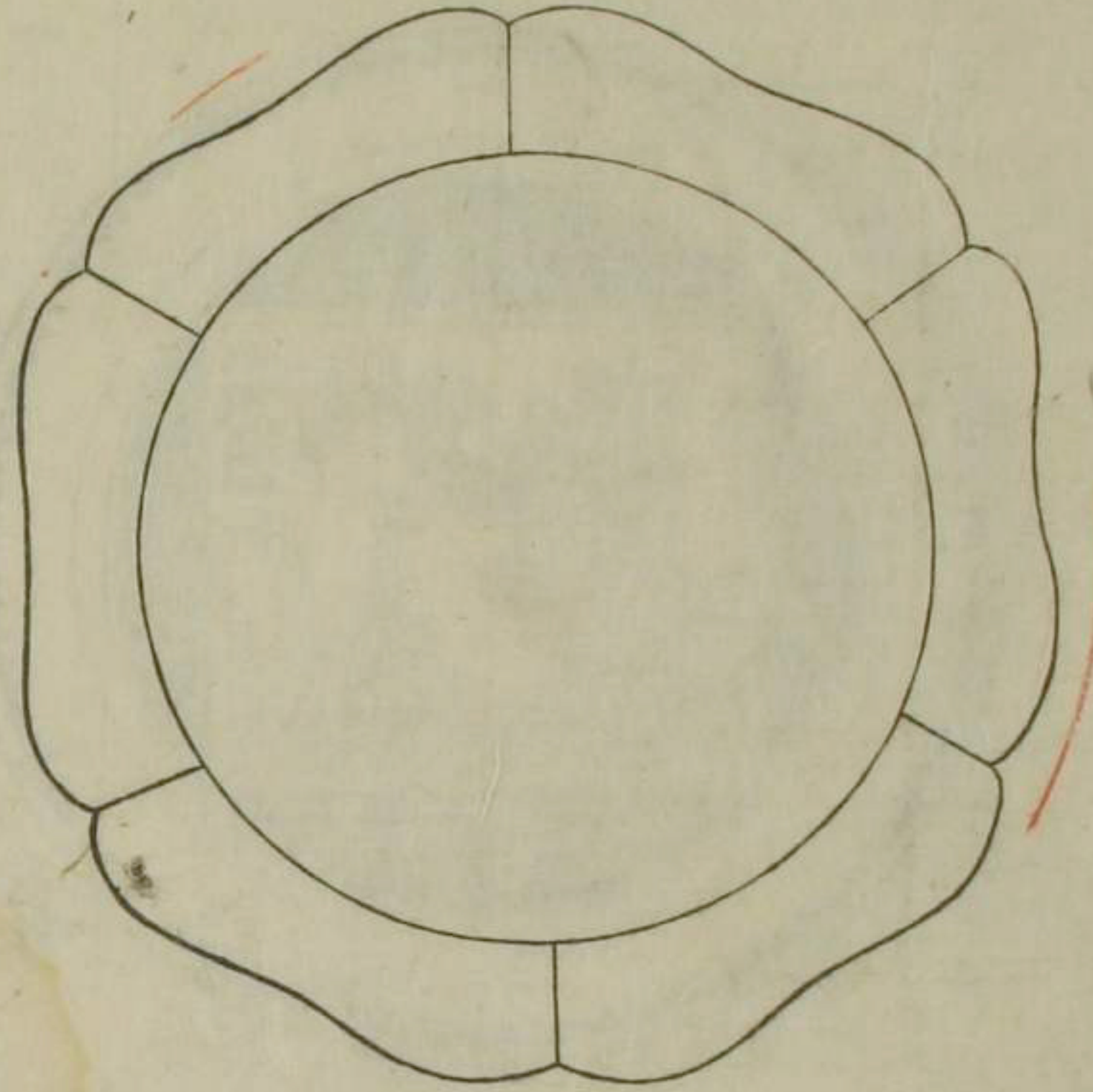


瓶子

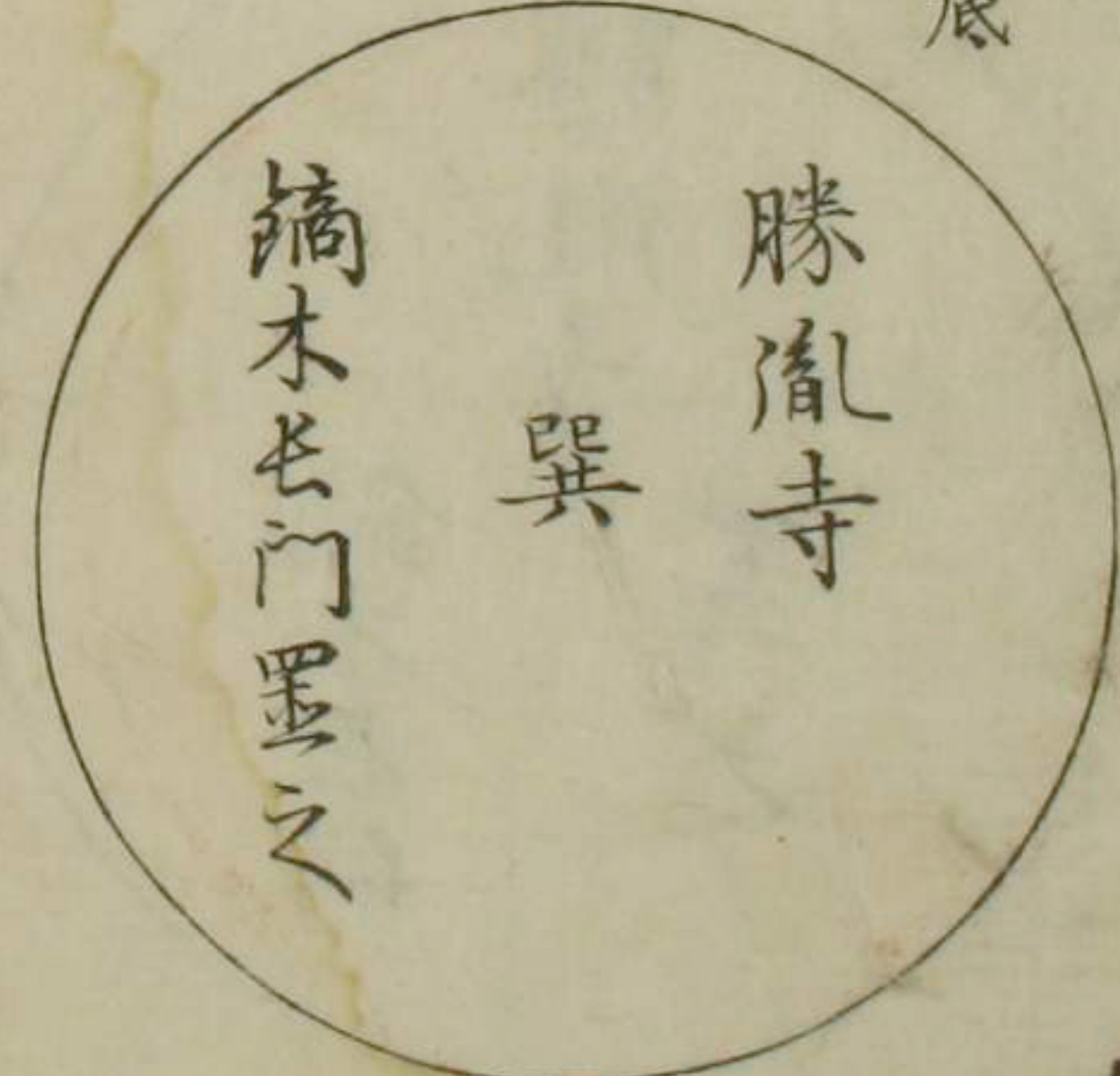
二尺

外ニ徑一尺五寸ノ丸キ坐蒲團ノ如キ切レテ當四錢形ノ縫ツシアリ祖芳ノ遺物ナリト云

朱漆八枚
徑三寸四分



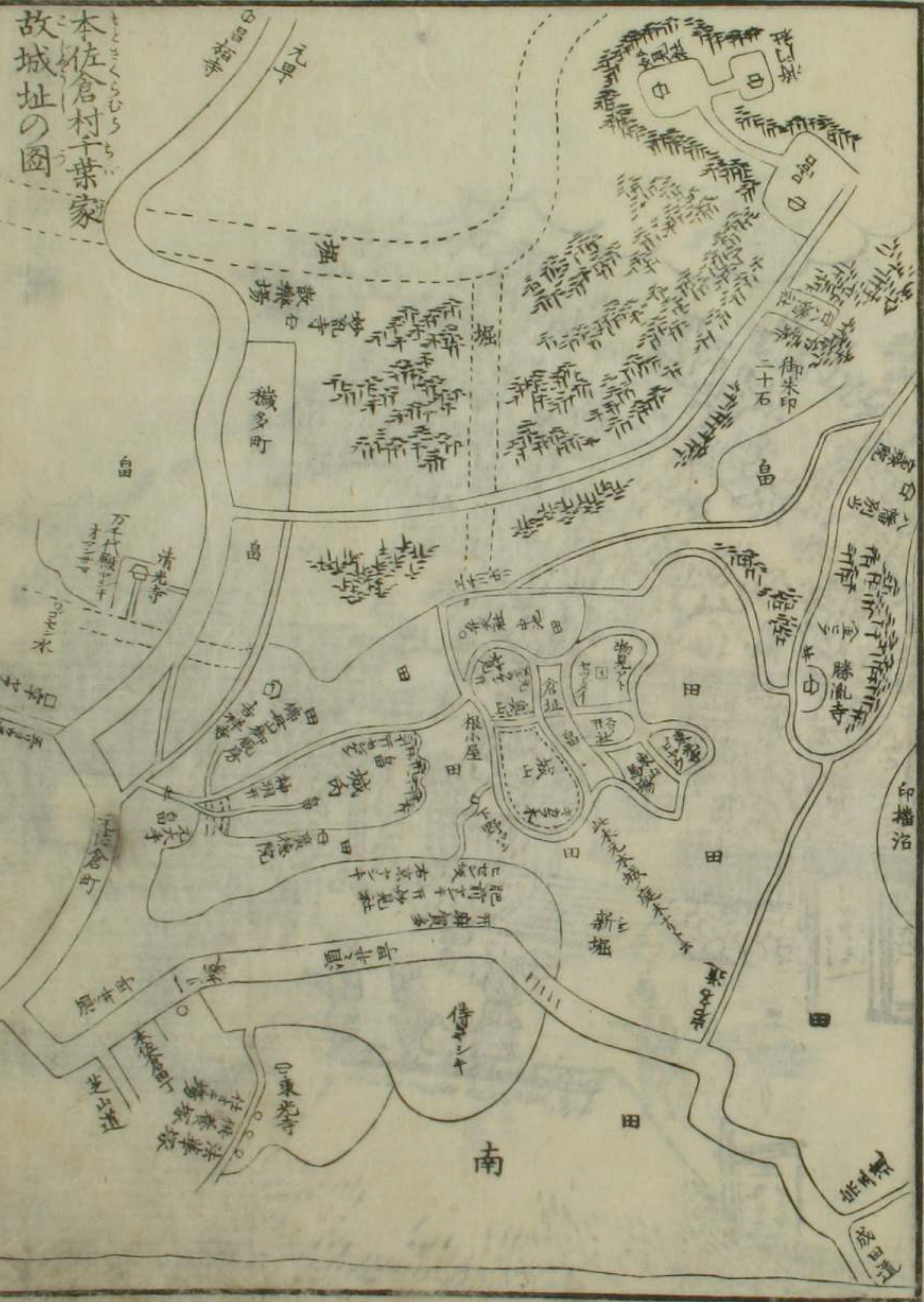
底



徑二寸六分

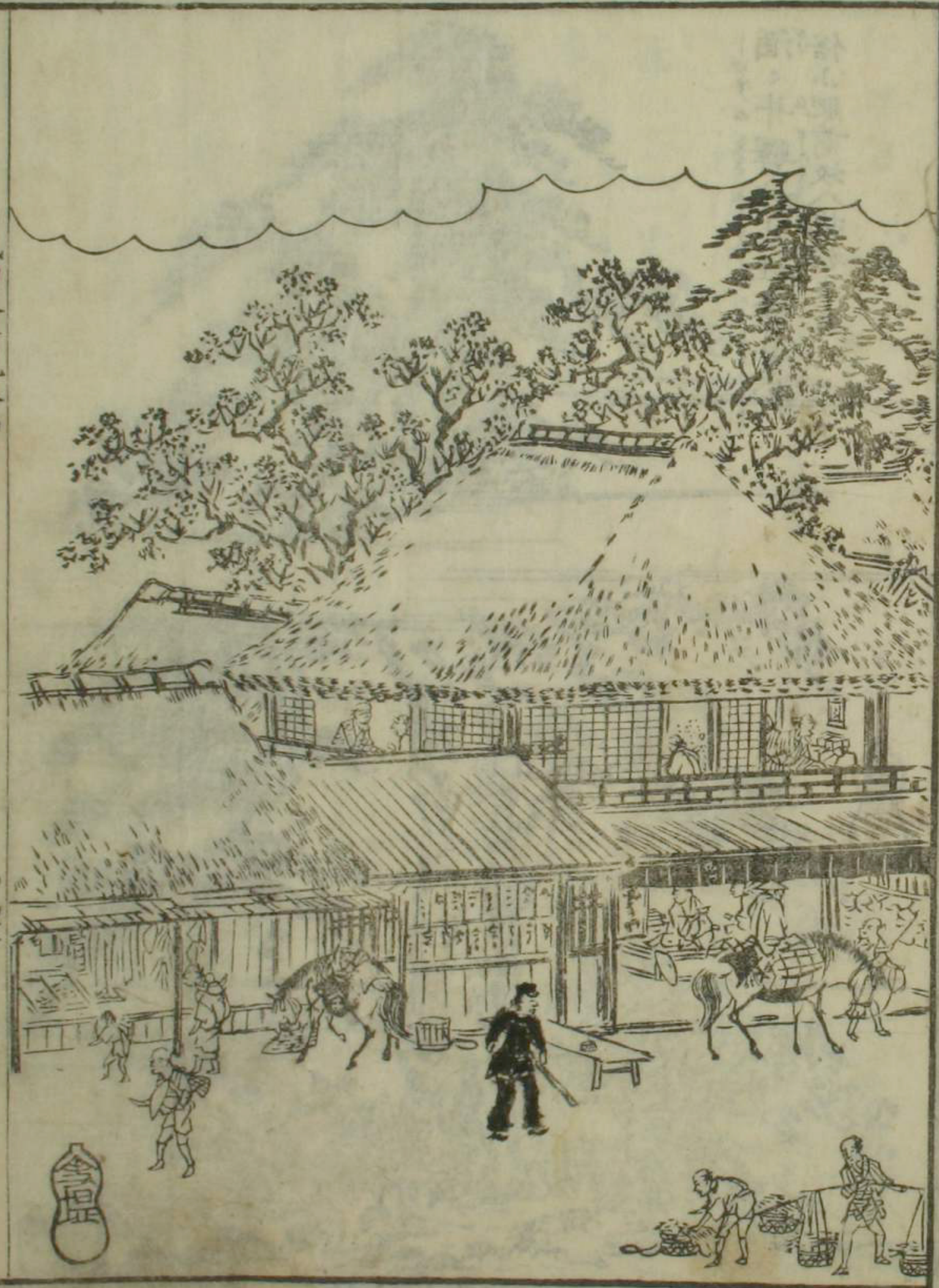
本佐倉町正谷山
長勝寺鰐口徑分七分

福徳二年、延徳三年、
才頭白八常陸小田ノ
一族下総ニ掛錫シ香取
郡大根村ニ文明十八年
逆修ノ碑アリ頭白イ常
仙雜話ニ詳ナリ
或云瓜連常福寺過
去帳享祿元年戊子
三月朔日大田極樂寺
開山虚海寂、虚海称
頭白上入トアルト和光
院年代記ニ村松ヲ再
興セシトハ確説ナリ小田
ノ族タルハタシカナラス
常仙雜話ハ東國戦記
ノ類ニテ証トハナシカダシ

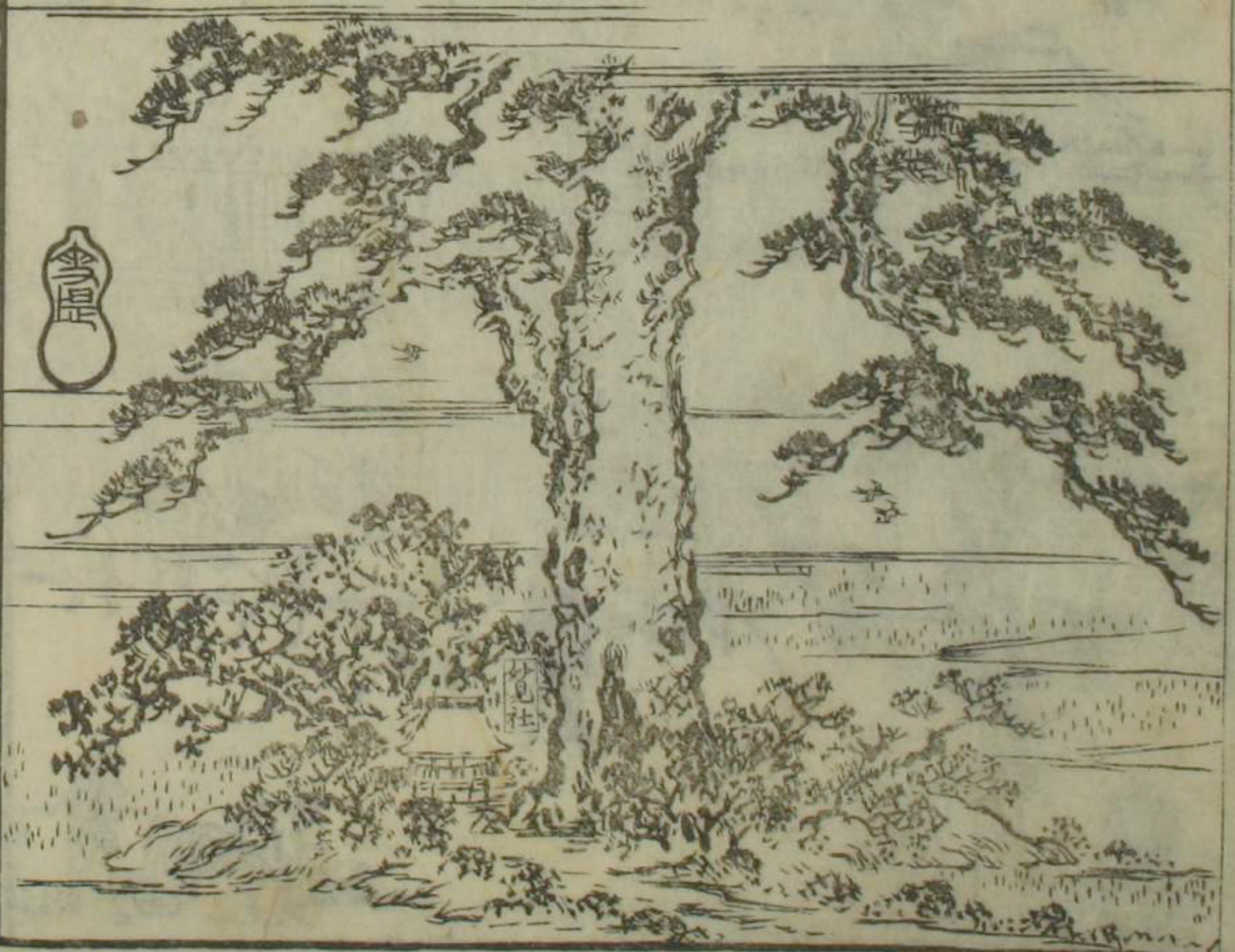


○成田参詣記卷四

○里



酒井驛妙見社傍老松
俗小肥前坂八抱松と云



印播沼 治小あらし湖なり江など
郡名とむなしく沼の頭りに稲葉村あり井物

川の川上に 是より買せたる名之源八数條あり一戸神平戸此間より来

里一八林佐山の間より来里共に舟尾の下にて舎一廣六町は東

南の方へ一里不と流き師戸にいたり鹿島橋の下にて物井川を管き

廣拾二町許とをり是より東北の方へ一里半不と流き平賀小いたり是より

北小折を弥張大小なる其廣二里むらり印播埴生み二郡小亘り安食の

地にて利根川へ入る其入川の口凡そ三十間と云沼中噴水穴多あり土人

サク子穴と云秋冬の交鰯魚水に温氣を好み此小集る故名はくと大なるハ

吉高を下小二所安食の下に七所り里漁人試小竿を豎う一カを極めて投す

多小水清みお社とも其影をえりる程さづき暫して浮出といつても餘程深

きこくとく見ゆ大さる孰も一二間四方なり常小水とふさ出にる絶され

ども水に上揚る程小あらし夏日遙雨をり治上小陰火あり或聚り

中川 望むの園
望むの園

苔清水

こくちらね

水を忍び

そられんま

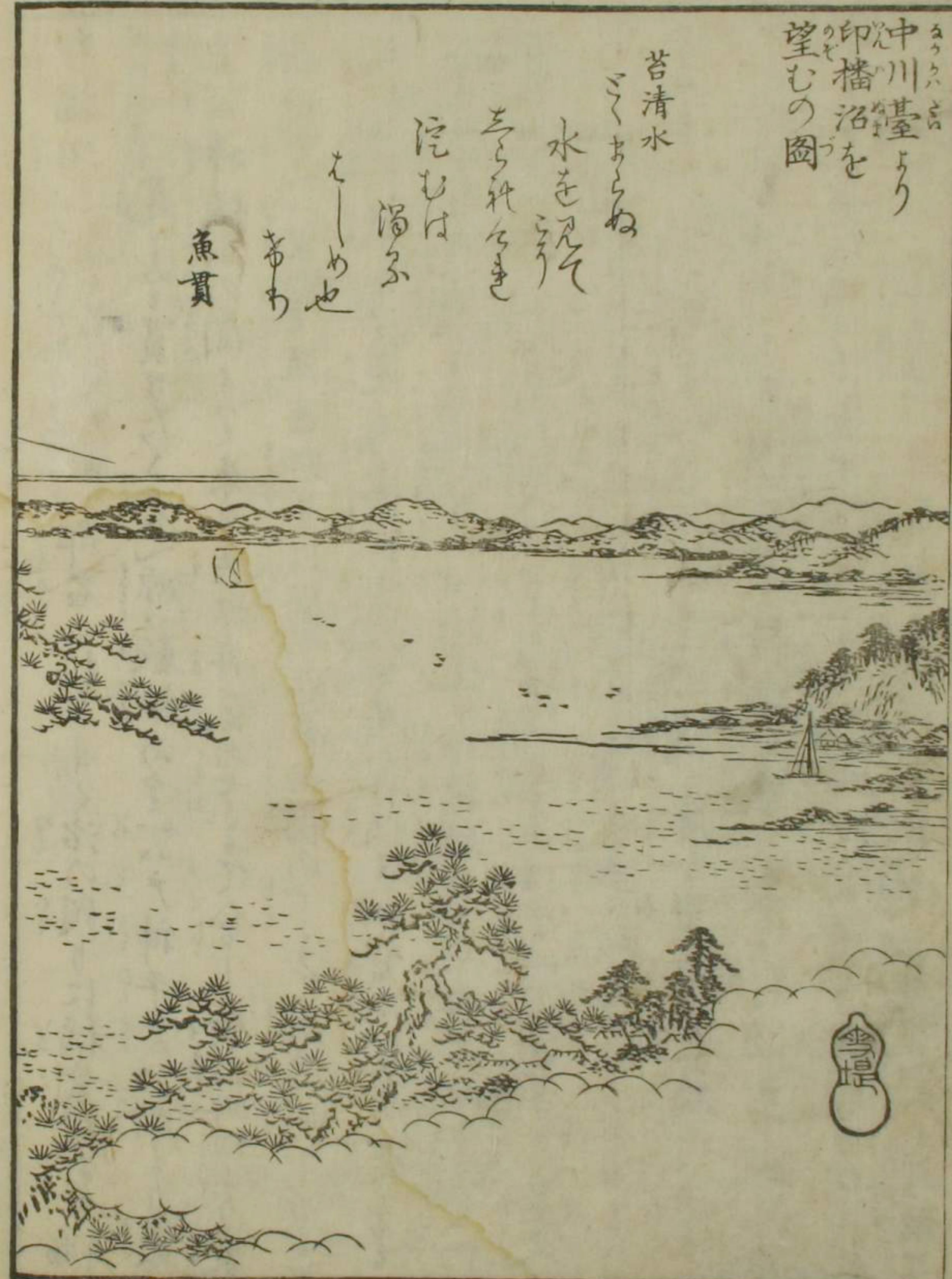
淀むは

溜ふ

としめ也

あち

魚貫



金塔

中川

此地每家井水
噴出清冽愛
ふ

荒波山



成田参詣記卷四

〇四四

或散り忽ち遠く忽ち近く亦一奇觀之

○佐倉風土記云江之為景不宜于平者蘆荻遮望也而宜于登覽矣其登覽者平賀為佳飯野次之烟收水澄一鑑萬頃環浦之山如揖如坐如走如駐翠屏畫閣者平賀之望也浩々大江一條鎔銀以為長帶水匹練沙禽飛鳴風和日斜而面富士峰于其千里表者飯野之眺也凡環江村三十神也保品也青菅也先崎也臼井也土浮也萩山也飯田也大佐倉也柏木也下方也北須賀也八代也大竹也酒直也安食也俱連印東而起於乾繞于免離震以終于北為船尾也松崎也吉田也巖戸也師戸也無刈也瀬戸也松蟲也萩原也中根也笠神也皆連印西而起終回繞於印東為

佛林山淨泉寺 印播郡伊篠村あり曹洞宗常陸國多賀郡杉室大雄院小属に開基粟飯原胤光開山断江周恩和尚 明暦四年乙卯 本尊十一面觀

音八粟飯原豊後守胤光 一亂長小作を以左 守を考るなり延徳二年庚戌八月

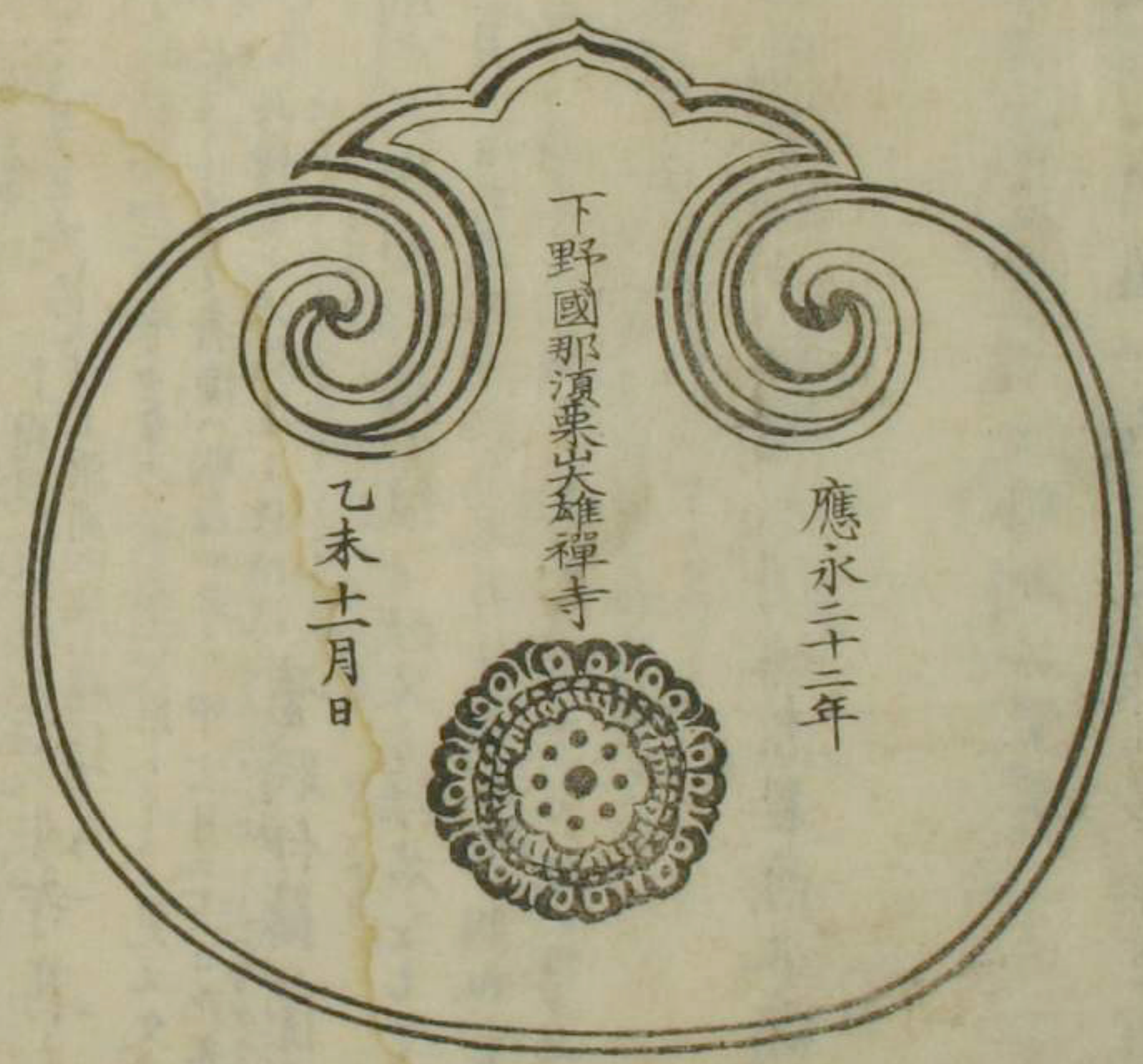
十八日建立す周恩と一々寺をたじむ 周恩ハ杉室の二世也 此寺其をり周心院と云と千葉補胤の時 此時馬加康胤子葉の家事を取り見元女書も胤胤より常釋 僧住壽星住持云 此僧も大権院住持に 當時伊篠ハ胤光居り地と見え胤光死後子右衛門三郎胤信周心院と改又法名もて寺号とせ

胤光永正五年戊辰十二月十一日死年五十七名寒翁淨泉居士 明和七年寺記云 本寺も寺号も小栗周心院より持来り一歳を引寺をたじむをれゆ周心院と号せりと云

○伊篠の並木と李道並木と云 此地李道新田と稱は此人ハ 延喜式諸國騎路邊植果樹令往還人得休息若無水處量便掘井云

○甲斐叢記卷 北史韋孝寬為雍州改路測一里置二土墩處植椶代為周文帝令天下效之一里植一木二里植二木百里植百木

浄泉寺所藏銅雲版
浄泉寺トシヨリトクニシテ
 横一尺四寸三分



應永二十二年

下野國那須栗山雄禪寺

乙未十月日

寛文十一年戌夷則日過去帳叙ニ天文廿三年甲寅七月吉日浄泉院寄進粟飯原イナノ
 胤満開基寄附之守本尊之後背ニ如是朱漆ニテ書付有之也トアリサレト今ハ差コミナシ

列觀經尼

基坐ノ裏圖ニトキ
 識アリ妙觀ハ胤光ノ
 母堂ニヤ

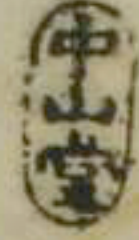


長一尺許

背ニ圖ノ如テ指ロアリ

此處過去帳佐倉風土記ホニ舉タル識語ノ付シ
 サシコミ有シナルベシ

印東庄伊藤少村事
 粟飯系豐後入道淨泉
 仍止与周心院於上成
 菩提所次普光寺
 二宗比丘尼如每之加
 扶持此世相子之孫之
 不之有也遠之狀也
 明應二
 十一月九日常輝
 粟飯系其後入在及

成田恭請記卷四終 

相守亥父左也相以之也
 依下金山并相以神宗
 寺但先例可之領念河
 度念寺領伊藤少村之
 事周心院以寄進是
 又正其有也遠之狀也
 永正六年九月末相覺
 粟飯系其後入在及

竹口貞齋刻

